



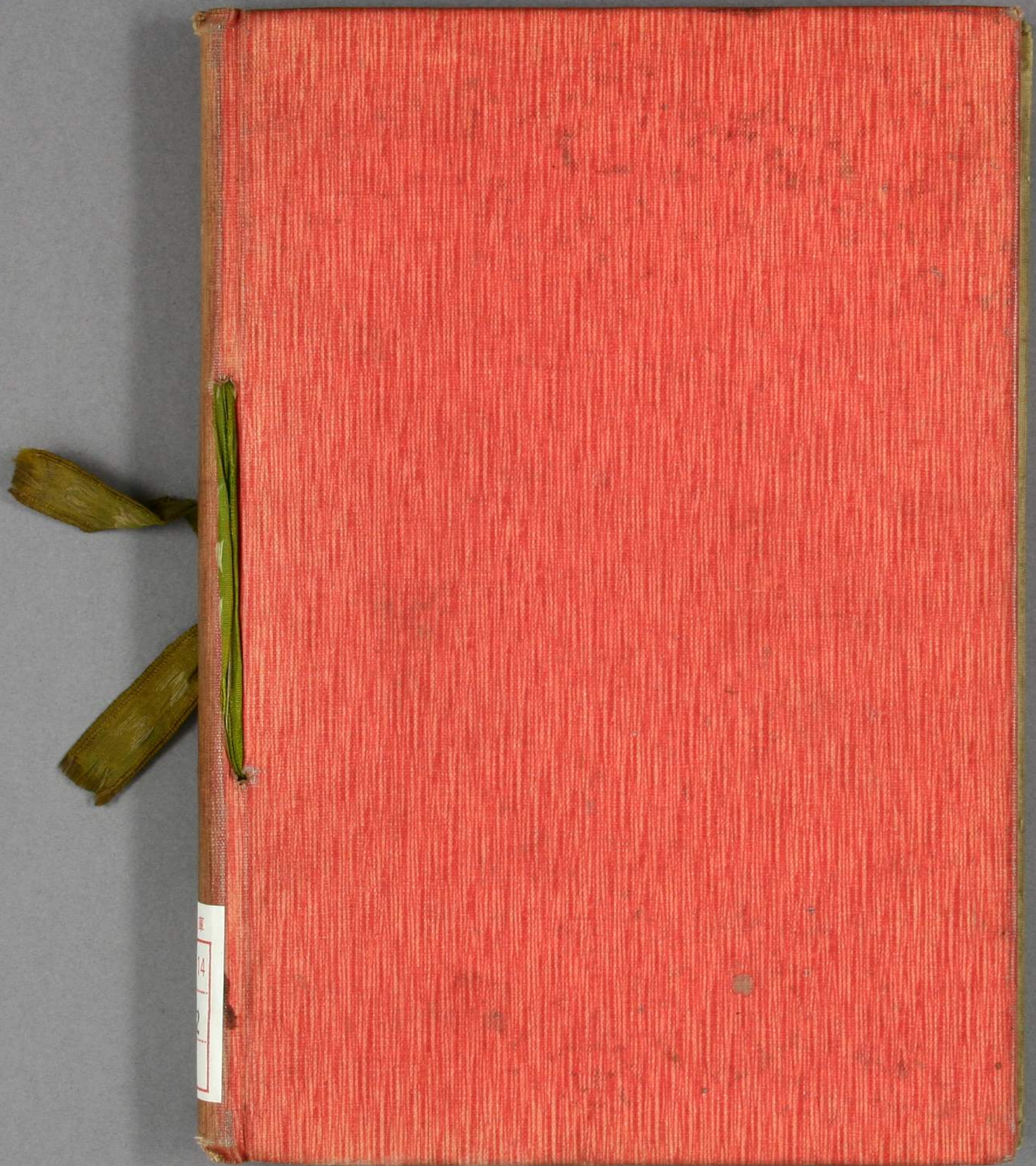


本間文庫

文庫 14

**D** 52







善の本と新刊  
新井大正堂  
長野・電二〇三

本閣  
文庫





白  
玉  
姬

泣  
董  
作





文庫14  
D52

この書を高安月郊氏にさへぐ



目次

詩歌

鶯と大原女……………一  
冬木のささやき……………二四  
花賣女……………二七  
桂女の歌……………三七  
戀ぐさ……………四三  
はずみ……………四六  
夏の日……………四八



散文

京日記

栗盗み

静夜

破芭蕉

戀の姉妹

散葉

感興

寂しき夕

すすりなき

時雨の夕

岡崎だより

日曜日

静夜

秋興

彼岸

法然院

雨の午後

舊樓

落書

をりをりの記

奈良の一日

よき日

鳩ものがたり



椿の花	七三
戀がたり	七四
詩論	七五
閑居	七六
自然の賄賂	七八
懷舊	八〇
鑛泉	八三
夕暮	八五
鷺に似たり	八六
回想記	八八
偷盜	九三
離愁	一〇〇
樂のまぼろし	一〇九

消息三章	一一〇
飼鳥日記	一二七

目次畢



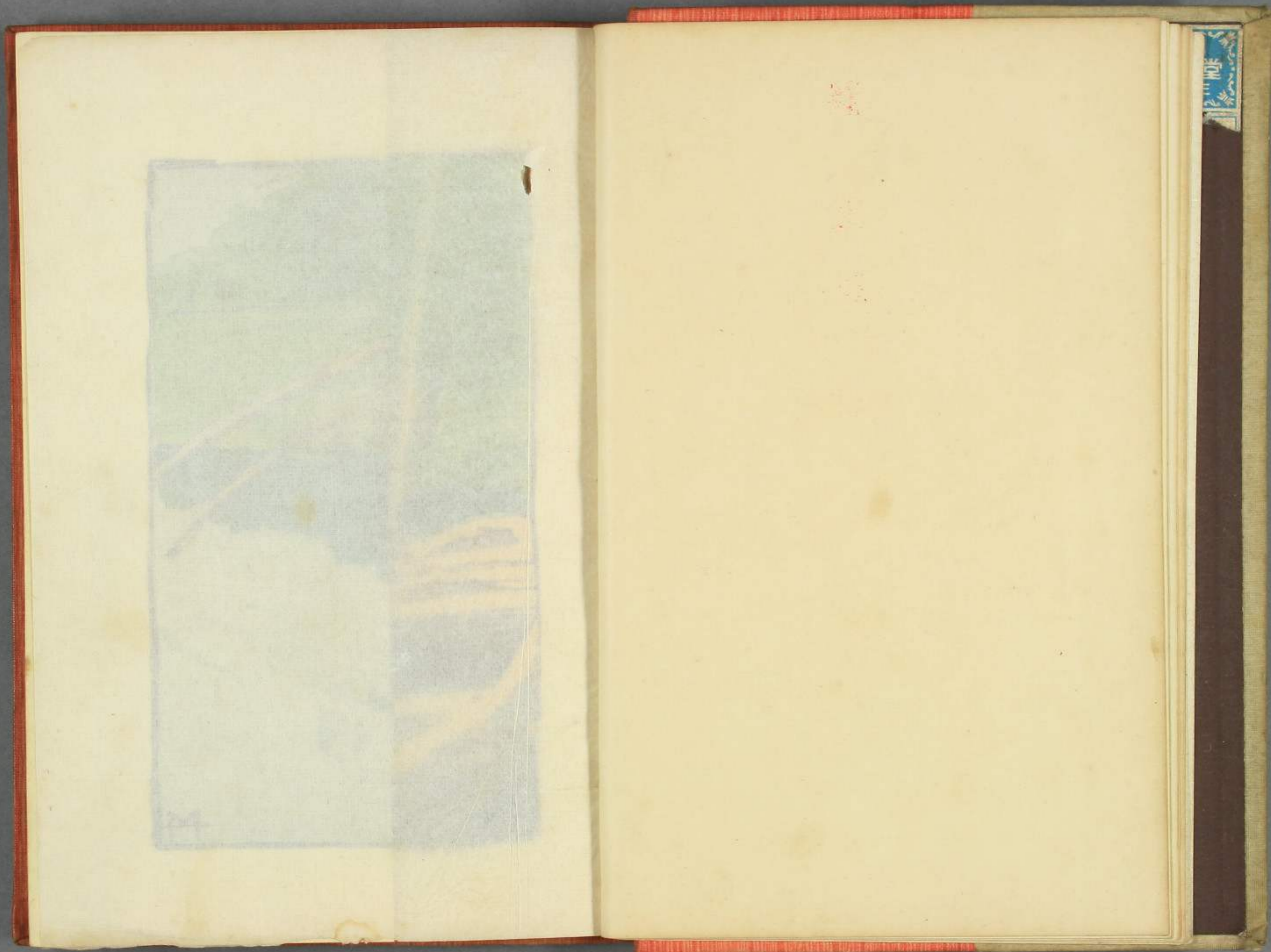
詩

歌

繪  
畫

滿  
谷  
國  
四  
郎









INDEX







鶯と大原女

ひと日、黒木の代刈ると、  
深山陰野にわけ入りて、  
樹の又枝にうぐひすの、  
やんら、巢を見た、大原女。  
さつさいよこの、  
巢ごもり。





二  
『やをれ待たしやれ小木ぢゃとて、  
享けた生命はあるものを、  
情知らずの方わいな、  
やんら、君は。』と鶯。  
さつさ、いよこの、  
とがめや。

三  
『十代の小田も有たぬ身は、

黒木めせとて都へも  
往かざるまい人の世の、  
やんら、習ひ。』と大原女。  
さつさ、いよこの、  
人の世。

四  
『山の女神にゆるされて、  
かけた吾家は小かるが、  
三の卵もありそろを、



やんら、如何。』と鶯。

さつさ、いよこの、

たまごは。

五

『伏せた卵のひと粒は、  
軒の燕子、羽ぐくみの  
胸毛のしたに忍ばせて、  
やんら、解へそ。』と大原女。

さつさ、いよこの、

つばめに。

六

『君が軒端のつばくらめ、  
抱いて一つは解へそとも、  
のこる二つがいたはし、  
やんら、さても。』と鶯。

さつさ、いよこの、

ふたつが。



「またのひと一つは、馬うま小舎こやの  
窓まどに群むられゐる雀すずめ子の  
巢すごもる母ははに抱いだかせて、  
やんら、解かへそ。」と大原おほはら女め。  
さつさ、いよこの、  
すゞめに。

「燕つばき、雀すずめに羽はぐくまれ、

二つは雛ひなになりもすれ、  
残のこる一つや雛すいりこ子の、  
やんら、よしな。」と鶯うぐいす。  
さつさ、いよこの、  
ひとつは。

「残のこる一つは、野のづかさの  
高たかみに歌うたの浮うかぶ朝あさ、  
雲ひばい雀すずめの床とこにおきそへて、



やんら、孵へそ。』と大原女。  
さつさいよこの、  
ひばりに。

一〇  
『すりやな、孵へろが、繼鳥の  
飼乞の鳴も知らぬ身で、  
春の日ながさ何を飼に、  
やんら、飼をか。』と鶯。  
さつさいよこの、

餌がひに。

一一  
『されば、夜業に手づくりの  
麥炒、繫蓑壺に盛り、  
白餌、鶯雛餌程よさに、  
やんら、飼はそ。』と大原女。  
さつさいよこの、  
餌がひは。



一二

「森に育つりや、山百合の  
葉のぼる露も飲まじよもの、  
白餌、鰯餌名こそあれ、  
やんら、渴こ。」と鶯。

さつさ、いよこの、  
かわきは。

一三

「渴き小川の水か、また

大葉黄蓮花の酒、

貝の片葉のさかづきで、  
やんら、掬まそ。」と大原女。

さつさ、いよこの、  
さかづき。

一四

「花の笠きた優をとめ、  
春日ふたゝび歸るなら、  
もしや野心、さそはれの



やんら、有るか。』と鶯。  
さつさ、いよこの、  
野ごころ。

一五

『あらば、野心ゆるされて  
歸る、山にも無けりや、また  
花の木末に籠かけて、  
やんら、鳴かそ。』と大原女。  
さつさ、いよこの、

こずゑで。

一六

今はと黙せ、『賢し女の  
養ひぶりは然はあるが、  
母の音色は知るまい。』と  
やんら、歎いた鶯。  
さつさ、いよこの、  
木かげで。



冬木のささやき

一  
日は神無月、午さがり、  
秋野の姫は往き過ぎた、  
み山陰路の片そばに、  
落葉ばやしの村木立。

二  
渡りの禽の來ぬひまに、

落ちた木實は乾反葉の  
散の亂れに降り埋めて、  
異木異木の冬がまへ。

三  
冬來るたびに籠る身の、  
それと近にはえこそ見ね、  
冬はいかなる姿かと、  
今日し木立のものがたり。



栗の老樹の言ふことに、  
「わが見た冬は手突矢の  
矢だはね高くふりかざし、  
螺髪みだれた童がた。」

四

わが葉ずくなの錆烏帽子、  
つと反さまに振ひ去り、  
また、踏そばの榛の樹の

五

こずゑに落ちた童がた。」

櫛の若樹の言ふことに、  
「わが見た冬は八束ひげ、  
胸もと長にふり解いた、  
木の葉ごろもの翁さび。」

六

嗚聲さびた盃ものに、

七



天の御龕の戸をあけて、  
『すがれ』を森に降し來た、  
いづな使ひの翁さび。』

八

檜の素立の言ふことに、  
『わが見た冬は夕づつの  
ちいさ火盤を手にとりた、  
白よそほひの尼をとめ。』

九

腕だるげにくづをれて、  
『今日死のやがて醸の日か、  
うらみじ世は。』と静うたの、  
ついで忘れぬ尼をとめ。』

一〇

椎のしもの言ふことに、  
『何日かや物におどろいて、  
長日の夢のさめた朝、』



わが見た冬は山の禽。

一一

こころがまへの張肘に、  
羽風そよると降し來た  
濃青の翼、尾こそあれ、  
わが見た冬は山の禽。』

一二

さては白膠木の言ふことに、

『さら愛男、さびしげに  
天の御門に立たしる夜、  
わか見た冬は背焼馬。』

一三

肌背にのせた古歳の  
投貨はららに振りすてて、  
とどろと揚ぐる四白の  
樹間に消えた背焼馬。』



一四

「翁ぞ」、「否さ童部ぞ」、

「乙女ぞ」、「禽ぞ」、「駒ぞ」とて、  
われ劣らじと言ひ張りた、  
落葉ばやしの村木立。

一五

「賢らがりは然はあると、  
ついで分くべき事かいな。」  
「いっそ桂に聴きもすりや。」

「さつさ常磐の女桂に。」

一六

「なう」と呼ばれた女桂は、  
諸肩すずるたゆらかに、  
「冬か、冬は。」と言ひさいて、  
もの耻花に口ごもる。

一七

見れば、峰越の樹がくれに、



百濟緒琴を手にばさみて、  
白よそほひの使ひ姫、  
やんら、御冬の供奉わいな。

一八

『あな』とばかりに落葉樹は、  
垣間見たやら、逸れたやら、  
われかの様に酔ひほけて、  
むすぶ長日の夢ごころ。

一九

冬は片ゑみ花やかに、  
桂のそばに馴寄来て、  
『落葉木立を言ひ消その  
賢らがりはまたせざれ。』

二〇

渠等は夢み其方は覺む、  
覺めた生命のさびしさと、  
憂さは譽れや、然はあるが、



夢の子らには高過ぎる。』

### 花賣女

一

こちが賣る花何ござる、  
鹿子百合、あやめ草、  
ふたば葵や、山うつぎ、  
花に四種の名がござる。

所がらとて、  
かづく花箕や、  
里の娘子うちつれて、



まゐる、やれ、都へ。

こちが賣る花鹿子百合、  
山の女神が夢まくら、  
寢息の冷の香にしみて、  
咲いた巖根の鹿子百合。

所がらとて、

がづく花箕や、

里の娘子うちつれて、

まゐる、やれ、都へ。

こちが賣る花葵ぐさ、  
阜月なかばにはぐれなど、  
玉依姫のくちづけに、  
ほほゑみそめた葵ぐさ。

所がらとて、

かづく花箕や、

里の娘子うちつれて、

まゐる、やれ、都へ。



こちが賣る花白あやめ、  
兄はお山へ石切に、  
往かざるまい朝路の  
別れの澤の白あやめ。

所がらとて、  
かづく花箕や、  
里の娘子うちつれて、  
まゐろ、やれ、都へ。

こちが賣る花山うつぎ、

母にかくれて逢引の  
宵のふたりが踏みなれた、  
門の垣根の山うつぎ。

所がらとて、  
かづく花箕や、  
里の娘子うちつれて、  
まゐろ、やれ、都へ。

花のひとつの鹿子百合、

二



姉が小路の室町で、  
通りすがりの髪長の  
姫に撰られた鹿子百合。

所がらとて、

かづく花箕や、

里の娘子うちつれて、

かへるやれ、山家へ。

花のひとつの葵ぐさ、  
御生まつりの片鬘、

髪に挿しやるか、色白の  
公家に召された葵ぐさ。

所がらとて、

かづく花箕や、

里の娘子うちつれて、

かへるやれ、山家へ。

花のひとつの白あやめ、  
あやめの占を結ぶとて、  
若音なよびた年弱の



妓よめに呼よばれた白しろあやめ。

所ところがらとて、

かづく花はな箕みや、

里さとの娘むすめ子こうちつれて、

かへる、やれ、山やま家がへ。

花はなのひとつつの山やまううつぎ、

紫し衣えの御ご坊ぼうに招まねかれて、

大おほき御み寺てらの御み影えい供くの

供く華けにささされた山やまううつぎ。

所ところがらとて、

かづく花はな箕みや、

里さとの娘むすめ子こうちつれて、

かへる、やれ、山やま家がへ。

そだてた花はなが妹いもなら、

許ゆるりたお方かたにめてられて、

まめにあれとのこちが身みは、

花はなの姉あね御ごか、——白しろ河かは女め。

所ところがらとて、



かづく花箕や、  
里の娘子うちつれて、  
かへるやれ、山家へ。

### 桂女の歌

彌生あけぼの花ぐもり、  
川瀬瀬まくら娘こそ躍れ。

よいやな、

『誰ぞ』と桂女、

さんさ、梁くづれ、

よいやな、

『君は戸無瀬の鮎ならなくに』、  
よいやな。



眞夏、陰野のすずる往き、  
木叢がくれに人かのけはひ。

よいやな、

「誰ぞ」と桂女、

さんさ、萱野姫、

よいやな、

「君は葉守の神ならなくに」、

よいやな。

くぬぎ林の木ぐれ路、  
散の反葉にそよろのさやぎ。

よいやな、

「誰ぞ」と桂女、

さんさ、こぼれ栗、

よいやな、

「君は笑割の實にあらなくに」、

よいやな。

涸の河門の夕まぐれ、



根白萱間に歌こそわたれ。

よいやな、

「誰ぞ」と桂女、

さんさ、河原鶴、

よいやな、

「君は若音の鳥ならなくに、

よいやな。

野ゆき山ゆき八百日夜を、  
夫覚ぐるひの物わびしらに、

よいやな、

泣くや桂女、

さんさ、今ぞ知る、

よいやな、

「君は吾身の隠れの宮に、」  
よいやな。



戀ぐさ

里回さとわはづれを今朝けさ過ぎくれば、  
小野をのに河瀬かはせのさざらきや、

河瀬かはせの、河瀬かはせの、

小野をのに、小野をのに、

小野をのに河瀬かはせの音ねにたてて、  
笑わらみもこそすれ、やれな、戀種こゝろぐさ。

牧まきの繁路しげぢをまた分けくれば、

垣かきに犢こしのたゝずみや、

犢こしの、犢こしの、

垣かきに、垣かきに、

垣かきに犢こしの馴な寄り來きて、  
支さへもこそすれ、やれな、戀種こゝろぐさ。

峰越ねこ小阪さかをまた越こえくれば、  
野木のぎに日雀ひがさのむらがや、

日雀ひがさの、日雀ひがさの、  
野木のぎに、野木のぎに、



野木に日雀のさへづりて、  
呼びもこそすれ、やれな、戀種。

麓陰路をまた降りくれば、  
澤に真菰の若ばえや、

真菰の、真菰の、

澤に、澤に、

澤に真菰の片なびき、  
戯れもこそすれ、やれな、戀種。

今日の逢瀬の、こや語りぐさ、  
君はあえかにほほ笑みて、

あえかに、あえかに、

君は、君は、

君はあえかにほほ笑みて、  
抱きもこそすれ、やれな、接吻。



はずみ

藻伏束鮪春の日の  
ぬるい水面に浮くと見りや、  
芽ばり柳に翡翠の  
そよろと落ちた下し羽に、  
やんら、隠れた、また水底へ。  
隠れた、隠れた、  
しよんがいな。

今日は忍びに身に添へた、  
持經の御名で下こがれ、  
消そと思うたに、君が手の  
肩にかかりた驚きに、  
やんら、洩れ出た、戀の走り火。  
洩れ出た、洩れ出た、  
しよんがいな。



夏の日

夏山の木深い蔭に、  
 山の井の、やんら、さざらき、  
 木叢洩る光にとけて、  
 日はゆたにたゆたの姿。  
 靡き葉のそよのさやぎに、  
 睡げさの露のしたたり。  
 母が手の搖藍ごこちな、

やをら日はまどろみそめた。

鹿の子の若えさながら、  
 木下路、足なみ軽に、  
 馴寄り来た草刈むすめ、  
 日盛りの濕ひ得たさに。  
 水の面の影のひたひた、  
 そのかみの様か接吻、  
 すずろなる追懐の今



娘むすめ子は夢ゆめかのまどひ。

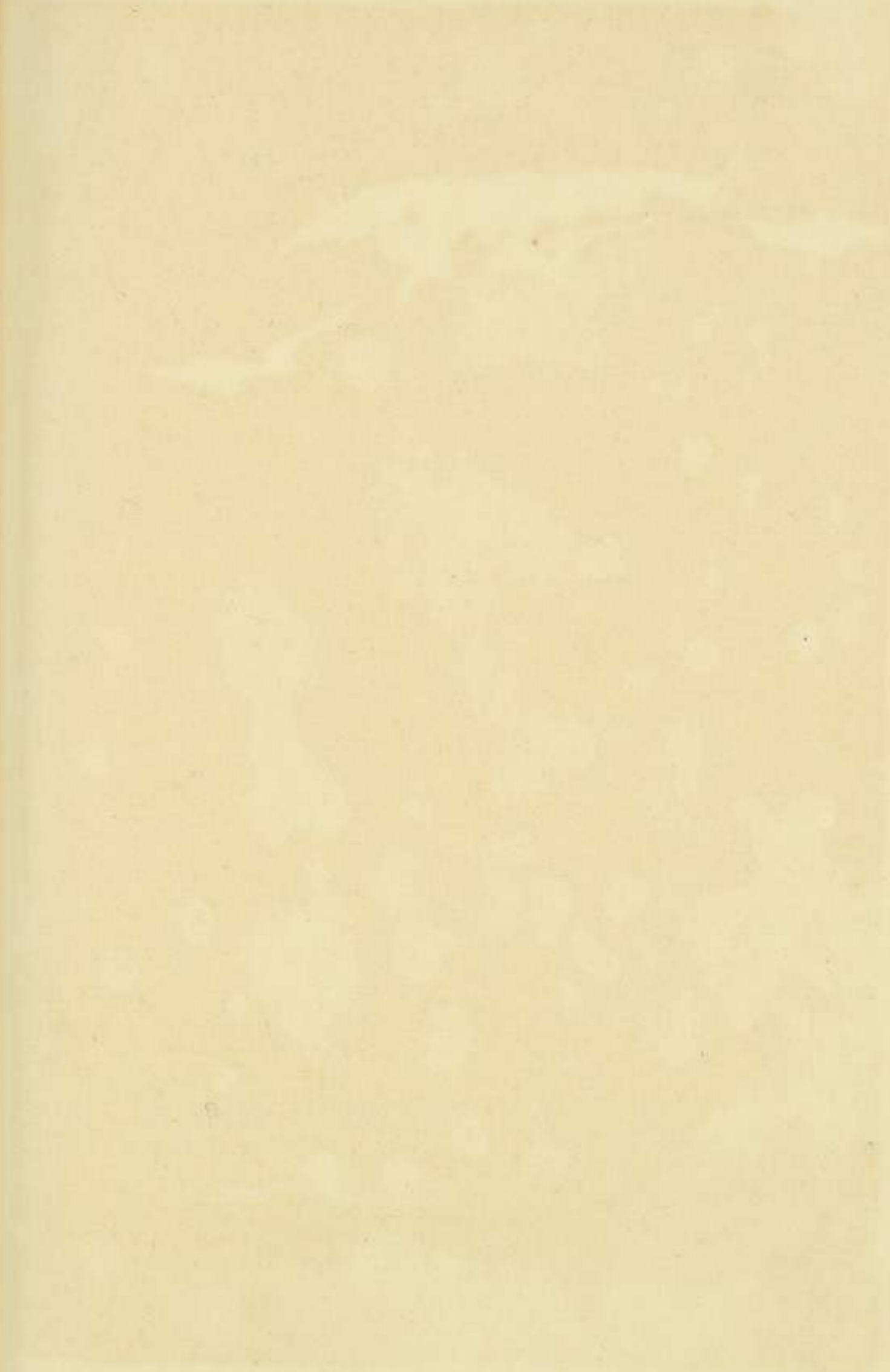
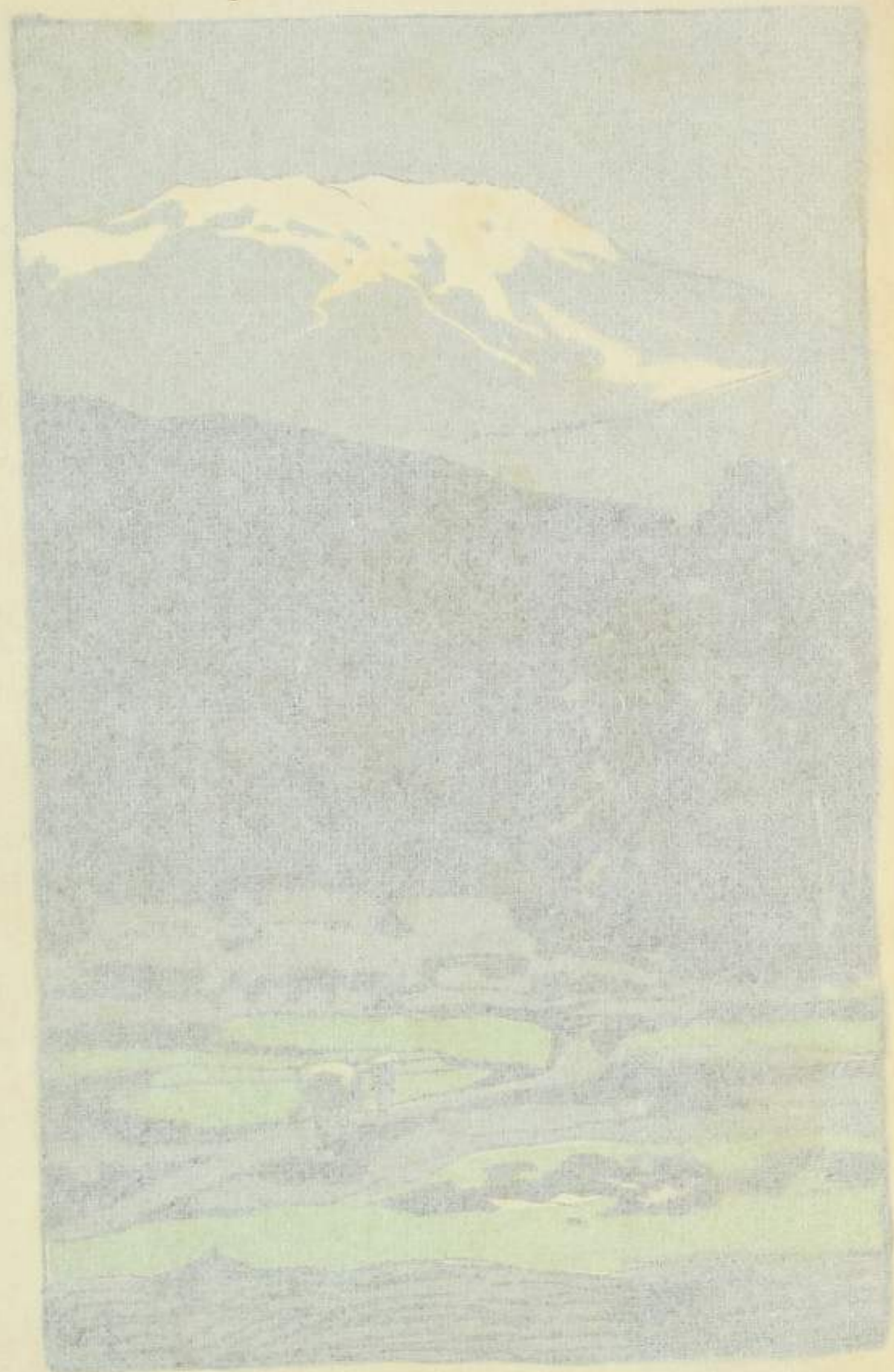
山やま姫ひめの手てにかもされた、  
盃さかずきの、これやしたたり、  
魂たまむすび、百ももよろこびの  
歸かへり來きた、微かかなゆらぎ。  
夢ゆめ心地こち、それもしほして、  
娘むすめ子はうるほひ足たもひ、  
草くさ薊あざろと木この間まに隠かくれ、

夏なつの日ひは又またもめざめた。



散  
文











京日記

栗盗み

夜は更けぬ。  
女性の魔の忍び足する如き音たて、村雨ひとしきり降り  
行きしあとには、二十日過ぎの月病女の如く首うなだれて  
天門の扉によりかゝりぬ。白衣の裳の裾ながう、空になび  
き、地に垂れて、曳きて常世の國の灰白なる墓石の上にかゝ  
るやと疑はる。



青鷺鳴きぬ、手近なる動物園に飼はるゝなり。かゝる夜は  
黒金格子の窓にもたれて、そのかみ眞菰、鷺草生ひしげる水  
沼の古巢に産み落したる卵七つを罔象女に取り隠されし  
夢などに見驚くなるべし。

垣のそと面に黒き影動きぬ。

隣りは住む人も無く荒れはてし大家なり、十年ばかり前に  
は某といひて、歌咏みの翁隠れ住み、その頃聞えたる物識と  
て藏書さへ並々ならず、今も残れる二構の白壁は其頃の文  
庫と傳へ聞きぬ。警策ありや、無しや、かゝる静夜にはその  
かみの執着さへ忍び出でらるゝまゝ、そと墓をくゞりぬけ

て、目馴の文集搜し索むるなどありかねまじき事なり。黒  
き影の何とは無う翁さびたるにても、よも推量は違はじ、今  
に身をすくめて高窓より庫に忍び入るべし、と窺ふに、影は  
かたへの立樹の根際を周る事三度、四度、足場をはかりて忽  
ち獸の如く幹に攀ぢあがりぬ。  
こは栗の樹なり、房生の實、昨日今日おほかた笑み割れたる  
を、——驚かるゝ哉、栗盗みなりしなり。

餘りの惘氣なさに、さらば今宵は盗食も咎めじ、悪戯たくむ  
も物越静かにてあれ、こゝに物案じする人こそあれと獨り  
ごちながら、硯かさよせて知れる臥龍窟の主人がもとへ詩



消息したゝむ。(三十六年十月十四日)

## 静夜

静かなる夕や。  
窓にのよりて眺むれば、裾は緋色に、頭はクロオム黄橙の色  
燃えさかれる夕の空に、示現山本堂の甍は濃き藍黒の一廓  
を形づくりて、兩肩いからしく聳り立ちぬ。  
こゝは聞えたる法勝寺の跡どころ、美音梵音天鼓、歎妙など  
の伽藍神は地形このかた、幾度か面のあたり、帝者、大徳、名匠、  
麗人などの生死を眺めて、廟宇の扉かたく秘密を藏して、夢  
魂ときに虹の如き息吐く事もありぬべし。今宵桂の香た



かくあたりを籠めたる夕闇に、鉦鼓の響さびしう、静かに經文を誦する身は、よしや戒行淺き沙尼が徒なりとも、心光深く胸に射し入るを覺えて、五十年の長生に優る一瞬の法喜を味ふ事なるべし。

青鷺のたぐひにや、物銹びたる鳴聲曳きて、御堂を横さに、辰巳の方へ過ぎ去りぬ。あとは物音一つ聞えず、緋は柑子に柑子は檸檬色に漸く薄れて、果は空一面に黒ずみたる藍色の幕垂れ来て、近く精舎の甍にかゝりぬ。

見よ、銀色の三日月は其幕を掲げて、流盼に人の世の様を窺ひ見る風なり。

神が其伎倆見する日撰は曆に記されず、其技も僅かに一瞬にして過ぎぬ、沙尼ならば陀羅尼誦み了るだに難かるべき隙なり。(同十月廿四日)



破芭蕉

村雨はら／＼と降りては止み、降りては止みする事かな。  
ともすれば裏續きの圃に入りて、京菜の根を穿り勝なる土  
龍すら、この程の不順に土牢の長夢貪ぼる事か、垣根にその  
容子だに見せぬを、昨日今日燕は寂しき海超えて南へ、椰子  
の樹青く生ひ繁る磯濱へ歸りゆくべし、空に飛び交ふ  
其の姿漸く稀になるめり。

アメリカはワシントン府の某街に、國祖の紀念なる大理石  
の碑高く空に聳ゆるがあり、秋來れば夥しき啄木鳥、日雀な

ど渡り鳥の群、此市を過ぎて南より北へと移りゆくに、羽向  
の勢なれや、碑に頭うちつけて落ち入るもの數知れず、主な  
き狗兒など其下に踞まりて、自なる餌を貪るよし傳へ聞き  
たるが、流石に旅心地のあわたしきも忍ばれて、哀れ深き  
事かな。

こゝらあたりの燕、おほかたは、高原續きに南河内越えて紀  
の國へ落つべく、數知れぬ群禽の羽音けたましく海路へ  
懸るとき、畑守りの翁、今日もぞと空ふり仰ぎて、暫らくは柑  
子の手入をも打忘るゝなるべし。

中垣を隔て、隣りに騒しき物音きこゆるにぞ、立ち出で見



れば、主あまじの人折柄あまじの雨間あまじを鋸携へて破芭蕉切り落すなり。  
葉はあちこち破れたれど、猶村雨あまじきくたよりともしらんと、  
さるにてもまた枯れすがれたる衰への様は見せじの心構  
へか、三株四株と切る程に切る程に、平家造ひらやぶくりの一棟裸形ひとむねらぎやうの如  
く背を露はしはてぬ。

村雨また降りいづ、かくても日は暮るゝなり。

夜に入りて寺町の俗人より消息あり、合の手に手際なくて  
叶はぬやうの短かき箏唄欲しとの事に取りあへず

雪消の岡のせゝらぎや  
流れ流れてゆくすゑは

蕁菜あざみつのごむ大澤へ

思ひ亂るゝ人の子は

紫野むらさきのゆき萌野もえのゆき

紅梅べにばい咲ける君が戸へ

としたゝめてかへしぬ。(同十月二十六日)



## 戀の姉妹

三

時代祭も過ぎて六日。肌寒うなりまさるかな。  
夜に入りて、さる人來りて戀語りしてかへる。  
時雨ふりいでぬ。客人は櫻の馬場あたりを袖笠かざして  
急くなるべし。

この人が戀の心ばせの氣樂さよ。健か者につきて瘡病の  
講釋うけたまはりたらんも之には過ぎし。エヌスを名と  
せる女神の姉妹ありといふは、われら嘗てアカデミアの聖  
者が『饗宴篇』に讀みしところ、客人の如きはかのデオテエを

母に有てる乙姫に事ふるものか。吾は必ずしも之を斥け  
ず、人は各その性をいつはらぬにこそ義しとはせらるれ。  
若し人ありて主人はと問はば、吾は唯テオクリトスが絶句  
の『われらのエヌスは世の常のものにあらず』。と言ひてあ  
らんのみ。(同十月二十九日)

三



散葉

詩仙堂を出でて、山に分け入るもの二人、瓢負ひたるは月郊氏（くぬぎ）のしもと、曳杖（ひきづえ）にゆくはわれ。  
木伐（きこり）の翁（おきな）に教へられて道逸（みちぞれ）もせず、日蔭（ひかげ）蔓（つら）齒（は）朶（た）など踏みしだきて漸く山ふところの廣みに出でぬ。こゝには石垣の上塗（ぬりべい）扉（ひら）高らかに周らせて、名は何とかあらむ、大寺物めかしく建てり。  
垣のそとに若やかなる楓の並木あり、午下り（ひるさか）の日影（ひかげ）花に輝りはえて、木末（きすえ）の紅色（くわいろ）溶けて根に滴たるかとぞうち惑はる。

紅葉狩にと思ひ立ちたる今日にはあれど、斯ばかりの色見んとは思ひもかけざりしをとて、吾は髮際（かみぎは）に觸るる下枝（げえ）の一葉を摘みて懐（ふところ）にをさめぬ。  
『然（さ）なり後の追懷（おひひて）にも』と月郊氏はやをら手を伸べて、爪先にこぼれたる散葉（ちりば）の紅き一ひらを拾ひぬ。  
物好（ものずき）にはあれど、吾は月郊氏がいづれの枝を撰ぶべきかを待ち設けしなり。しかもこの君は一葉（ひとば）をだに己が手もては梢より腕（うで）ぎ去らんとはせざるなり。  
われは心の深き底より物耻（ものばぢ）を覺えぬ。（同十一月十六日）



感興

感興は鳥の如し、いささかの物音にも忽ち飛び去りぬべし。生れて才の秀れたらん人は知らず、われら許されの少なき際は、怠らず内なる醸しに勉めて、その誘ひに賢しかるべく、一度馴寄に遇ひては、その囁きのまにまに侍くの謙遜と、妨げしたらんは、よしや顔よき女房なりとも、胸坐とりて扉の外へ追ひ遣るの心強さなかるべからず。今宵興來にあひて、久しく筆を絶ちし「天馳使」の稿をつぐ。大神の令旨うけたまはりたる、八柱の天馳使が伸羽うちつ

ゝ人の世に降り来て、比治の山の眞名井に浴みするあたりにして、急に想像の翼たゆみて、筆を抛つての止むを得ざるに到りぬ。

遠きいにしへ、ピンドルが見たるジウス大神の使ひ鷺は、縦琴の音に翼たためて眞玉なす笏の上へ眠り、レスボスの歌女サツフォが見たる鳩は、胸の冷にしも諸羽垂れさすと云へり。わが想像の翼たゆみしは何ならず鷺の鳴聲聞きたればなり。

如何なれば然ばかり貉にしも妨げらるるとや、今は詳に語りいでん勇をだに有たず、唯傷心のそのかみと思ひ出づれ



ばとのみにて事足りぬべし。  
まことに感興は鳥の如し、貉の鳴聲聞きて飛び去りては再  
び歸り來らん事思ひもよらじな。(同十一月二十日)

寂しき夕

日も暮れぬ。

霜月の弱げなる日射、鶯色の肩なだらかに天を、りたる比  
叡の錆烏帽子に、暫時照りはえて、やがて空にをさまりゆけ  
ば麓續きの山脈、浅むらさきの仄めき、見るがうちに藍黒に  
沈みゆくあわただしさ、さながら隠れの手の怪しき幕引き  
張るに似たり。

鐘鳴りぬ。

黒谷のあたり、杉の村立すゝろに肩すくめて身顛ひするか



とぞ疑はる。

風わたりぬ、老媪が冷たき掌にも譬へつべし。石階のうへ  
路草の絡みにこぼれたる乾反の散葉、つと身を起して矮人  
の如くささやきかはしつゝ、急がはしげにそそ走りゆくな  
り。

礫も到るべき近さに小き沼あり、白鷺ひとつ水際にたたず  
みぬ。すがれ残りの葦そここに取り亂れて、風なきにか  
さこそと囁く。パスカルが言ひけん『考ふる』の言葉、人の身  
のみにはあらで、かやうなる夕には葦自らの上にもあるべ  
くや。

今し天なる御力

なべての胸に躍るや、

隠れの玉琴細緒ゆらに、

鳴るは秘密のささめき。

みぎはの眞菰さびれの

ひと葉にこもれる聖ごころ、

そそや的矢の逸りに、

身にしも泌み入るきほひ見ずや。

この夕ぐれのせつなさ、



なべての胸に流るる  
 奇靈くしりの力のおほいなるに、  
 さこそその覺り、——心の  
 妙まじさゆらぎ見るにしも、  
 内なる應ようひを思ひえずば、  
 ああ玉敷たましきの世ながら、  
 惑まどひやいささか抱きつらめ。

(同十一月二十六日)

すゝりなき

ふと目ざめぬ。  
 肱ひぢかけ窓のあたり、微かすかに物のけはひを覺えて、夢に忍ばれ  
 つる髪ながの人もやと、諸手もろてさしのべ枕べ近く搔かいさぐれ  
 ば、徒たに冷えはてし夜よるの氣の胸塞ぐやうなるを覺ゆるのみ。  
 枕おさへてまた聞耳きみみたつれば物の音は窓の外面そとにありて、  
 さながら物怨ものえんなどするらしうをりをり、啜すすり泣なの聲さへ交  
 る様さまなり。起ちて窓を推せば、八日ばかりの月今しがた落  
 ちたりとおぼしき西山にしやまの巔いただか爪つめ白しろに、あたりは闇の幕重とぼく垂



れこめて、ひとむら時雨しのびに降りかかるなりけり。

二

(同十一月二十六日)

### 時雨の夕

夕ぐれ近く若王子路にいてたつ。  
牛叱る唳聲つよく響きて、荷車幾つか轍の音とどろに、岡崎  
橋を西へ折れゆきしあとは、あたりの大氣いと重げに沈み  
わたりて、大根の畑一つ隔てたる櫟の葉ずくなに吹き残さ  
れたる梢のそよぎすら、さだかに聞きさだむかとも思はる。  
黄鶺鴒一つ路べの腕木に來り、やがてまた何處ともなく去り  
ゆきぬ。清亮の音色鏃の如く心耳を穿ちて、初冬の寂しさ  
しみじみと身に泌み入る。

三



ささと音するものあり、女衣の裾ずれするかとも打ち惑は  
るるかな。

六

またしても時雨ふるなり。

黒谷のあたり、樹立は鼠色にたゞよひ、文殊塔のいただきは  
文字の如く鈍じみて、空はさながら永遠に妖惑におちいる  
かとも見れば、其も暫時、やをら樹立は黒緑に、塔は墨色にめ  
ざめて、愛宕さかひの雪氣の雲間を洩れ透く、入日の白みに、  
濡色美しくしう照りはゆるなり。

虹うかびぬ、北山は貴船のかなたなるべし。

時雨は未の方へと過ぎ去りて、下京あたり今はた見えずな

りゆく。

よそほひ衣すべして、

野山素裸のさびれを、

うらびれ心地に眺むるにも、

陸魂ふかく忍びて、

おほ御力の息ざし、

不壞なる醸しに酔ひの今ぞ、――

わが世譬へば落葉の

それさへ可惜身、弱げながら。





時雨は暫しとだえぬ、——  
鈍色あさき雲まに、  
ゆふ目のあからみ匂ひほのに、  
かなた貴船のあたりや、  
虹の環花にうかびて、  
かざすと見るまに應て消ぬる、  
さても刹那のひらめき、——  
見るだに涙のせきもあへぬ。

(同十二月三十日)





時雨は暫しとだえぬ  
 鈍色あさき雲まに  
 ゆふ日のあからみ匂ひ煙のに  
 かなた貴船のあたりや  
 虹の環花にうかひて  
 かざすと見るまに難て消ぬる  
 さても刹那のひらめき  
 見るだに涙のせきもあへぬ

(百一十三号)





岡崎だより

日曜日

今日は日曜日に候、かねての約束なれば午すぎ寺町を訪れ候。主人の名は鈴木鼓村氏、近頃新箏曲家として聞えたる人に候。奥まりたる家構なれば表通りの車のどよみも傳ひ來ず、市中とは申しながら斯る人の住居に相應しく候。主人は名題の平家好にて、自らは本三位中将重衡が生れがはりぞと稱へ、今の世に童子鹿毛といふ聞ゆる名馬もなけ



言  
れば『羅綺の重衣たるは』と朗詠うたはん手越の長者が女も  
なきこそ恨なれと口僻の様に申し居る方に候。いつも物  
語の緒は忠度、經政の都落に始まり、斯る花の散るやうなる  
最後は趣味の教養深き平家なればこそ爲し得たれ、鎌倉三  
代の衰へは様こそあれ、林檎の腐りたるにも似たらずや、  
源太が箴の梅が枝ぞ東夷が精一杯の凝なるべきと果は鎌  
倉のさげすみに終る習ひに候が、今日は珍らしく建禮門院  
の大原入御に語り及び、一秋こゝに遊びたる折の記憶を繰  
り返し、今は談話の種も盡きぬ、新曲『海人』など試むべきかと  
琴搔きよせ、爪しらべにかゝり候。『海人』は今歳春の晩れ方

斯人が絃に上し候『大原女』の姉妹曲にて、共に調を吉備樂と  
かに採りたる、耳新らしきものに有之候。

君は都のさかしら女

磯邊の小舎の訪れに

蛩が言葉のつたなきを

如何なればとや問ひ給ふ

と絃は小野の小路の如く上り下りて、人を龍鬚菜名告藻か  
き散れる磯邊の小舎に誘ひ來り、其處に衣美しき上臈と髪  
そゝけたる潜ぎ女とを見せしめ候。『とや問ひ給ふ』のあた  
りは、曲にして如何なる巧を見るべきかと案じ居り候とこ



る、甚だ巧みにまゐり候。

身は海松刈る 潛き女の

浪路の底に沈み入り

眞球珊瑚の玉しける

龍の宮居に目馴れば

と青海の潮のどよみも忍ばるゝよと典に入り候ところ、俄かに波の崩るゝ如き音たてゝ、弾きとどめ候にぞ、柱の一つはけたゝましき響して横さまに撥ね飛び候。弾手は静かに、

海の秘密を洩すやと

大海神の疑ひに

女の才を奪はれて

さは愚かしうなりはてぬ

と歌ひ畢りて、この結びの曲は未だ足はぬ所あれば、弾かぬこそ中々に禮なれと打笑み候。

折から正午さがりの日光橡樹の七葉を洩れ透きて、庭の面一杯に虎班を描き候、咲き盛れる百日紅の花の間より、濃藍の空女の如く笑を湛へ、をりく白雲の一片ゆるらかに流れ行くが打覗かれ候。

静なる秋の日や、主人も客人も今は言葉かはさんには餘り



三三  
に興に深入致し候、斯る日も候ひたらんには、兵衛佐も本三位が出家の願ひを許せしに相違なかるべく、牡丹にも譬へられ候中將の聖姿を見物なるべきにと悔しがられ候かな。

(三十六年九月六日)

## 静夜

燈火かきたて、ダンヌンチオの『フランチェスカ、ダ、リミニ』を開き、第三齣なる戀人同志がリミニの海も望まるゝ館にして例のランセロット物語を繙き、『王女は男かきよせ、静かに唇さしあてぬ』と読みさして、同じなまめきたる振舞致候條に讀み到り、涙の顔を振りあげ候ところ、寢待の月は今しも若王子の巔に上りたりと覺しく、黒き木立の間より銀色の光したゝり候。戀人の甘き接吻を振り解きながら、

“No, Paslo!”



と微かに叫びて後ろ様に倒れかゝり候フランチェスカが  
指の間より流れ落ちし涙も斯くやと存ぜられ候。

ひとむかしの前ダンテが地獄の巻に讀み候戀物語を今も  
興がる事かと冷やかに仰せられまじく候老武者の如く  
胸創を指して人前に昔日を誇る事叶はぬ身には隠れて其  
痕を守るのみがせめてもの心遣に候。何日の日暮に候ひ  
しか例の如く町はづれの野路を逍遙し丹色の雲華やかに  
愛宕あたりの肩に纏はるを眺め候時堪へず草の上に倒れ  
伏し諸手はさながら扉の如く顔を掩ひし事も候ひき。終  
日の物思ひに倦れも出でしにや其まゝうとくと眠りに

入り身は何時しか花園小路に反け様に倒れたる裸形神女  
の石像の側に起ちその胸乳のあたり兩の眞玉手に持ち添  
へたる桂の一枝に手ざはりすべく屈み候に白かる筈の花  
の色血色に添み出で候にぞ呀と叫びて闇の野路に目ざめ  
し事も候何かの暗示にはあらずやと幾日か思ひ惑ひしは  
此に候。夢は五臓の疲れと申傳へ候がまことに然あれか  
し夢に意をもとめ夢に事柄をさぐる自らの如きは類なき  
痴者なれかすと念ずる事に候。君よ斯ばかり思ひ煩ひ候  
ものゝ吾は猶天の寵兒たるを失はず候この清き心の創こ  
そは永く吾世の寶として世の人達に誇るべきものと信じ



候。

フランチエスカの物語より、はした無き事まで聞えあげ候、  
月は今弓丈ばかり山の巔を離れ候、青白の光一面に空に流  
れ、南禪寺あたりの松林は酔心地に濡れそぼち候。秋虫の  
聲雨の如く囁く前栽のかなたより、得も言はれぬ大氣の香  
鼻を掠め來り候は何の樹の吹息に候や、近くに満願寺とき  
こゆる古寺は候へども瘡肩ものめかしき老僧の住まふと  
のみにて、夜を徹して御堂ごもりに香燻らしながら、しめや  
かに語る上臈などおはす土地柄ならねば、唯秋の香とばか  
りにてあるべく候。

さらば御免候へ、これより物語讀みつぎ候べく、油注ぎても  
斯る静夜に戀人達の美しき最後讀み了らでは、また何の時  
をか待ち候はむ、さらば。(同九月十日夜)



秋興

この頃の秋の色や男山の祭もはや明日とは相成り候かな。  
正午すぎ家の人達は萩見にとて、高臺寺あたりへ出掛け候  
へば、家内はひつそりとして、物音一つたに聞え候はず。書  
き物にも倦みたり、硯など洗ふべきかと、厨に下り行き候に、  
灰も冷え果てし釜の後に、蟋蟀一つ懶げに鳴きをり候、キイ  
ッが『蟋蟀』の絶句さへ忍ばれて、秋興頓に堪へがたう嵩まり  
候まゝ、抜けて背戸に出て候。こゝには萩紫堯、白粉草、秋海  
棠など中垣に寄り添ひて、とりどりに花咲き候へども、秋草

の習ひとて、流石につましやかに候。高晴れし天には、一  
刷毛の織雲しづかに南禪寺山を離れて、北京の方へと流れ  
ゆき候。箸鷹にてもあるべきか、大幅の輪を糸がきて、黒谷  
は文殊塔の上をゆるらかに舞ひ居り候。  
敬虔にはた静寂に、譬へ様も無き斯る日の感興を、飽くまで  
も貧り得られ候はんには、甘き戀の百歳をも擲ち候て、娶ら  
ず、嫁かず、訪はず、訪はれず、身を僧尼の境にすら置きて、厭ひ  
は致さず候ものを。  
暫らくは思ひ沈みて立ち候が、ふと物呼ぶ聲に驚きて見か  
へり候へば、籠を肩に、頬冠りの翁



「棗實買はんかい」

と人の好さ相な笑顔を致し候。(向九月十四日)

## 彼岸

今日は秋の彼岸に候、野に立ち候へば、見わたす限りの稲田は漸く黄み、利鎌入るゝもこゝ二句を出でざるべく候。田面には引板曳きたり、大根畑の虫は昨日驅りぬ、今日一日は手づくりの村醪に、日頃の肩の凝を和らぐともあり候事か、畔にも鋤もつ人ひとりだに見られず候。

今白川道を西へ、糊硬の單衣着たる男の、萩の花束と薄の一握振りかつぎて、急ぎ往き候ふが、何となう見知り越のやう思はれて、言葉かけても見たく相成り候。この男定めし下



京あたりの數珠曳が家に嫁ぎ居る姉がり訪ね往き候て、手  
づくりの土産物に、この秋の收穫の見積など語りさかせ、里  
振の丸縮襷華やかなる姉が笑顔に、叔母が内密の傳言をも  
忘れ候ふ事なるべし。吾も田舎生れの、此程の事覚えなき  
にしもあらず候へば、獨笑ひ致しながら、近道より家へと、犬  
蓼の花こぼるゝ小溝を跨ぎ候ふに、側の稻田より雀の一群  
ばつと飛び散り、上を下にのたうちて、水車小舎を隔てたる  
玉蜀黍の畑に投ぐるが如くに下し候。餘りの亂がはしさ  
に、傍の大氣も何やら呆れ顔に、果は寂然と鎮まりかへり候。  
『あゝ秋だ』

四

覺えず口を洩れたる言葉はこれに候。(前九頁三十二頁)



法然院

今日は識れる人とふたり鹿谷の法然院にまゐり候、境は如意嶽の南、老杉ふかく閉ぢ籠めたれば、折柄正午頃の光すら射し入らず、閑寂譬へやうも無く、わが踏む足音も憚かる心地致し候。廣き本堂には、老僧を中に、雛僧幾人か左右に流れて、今しも勤行の最中に候。なかにうら若き尼僧の、そのかみの髪の懸り端なほ香油の移り香も忍ばるゝが、水晶の珠數爪繰りながら、靜かに首俛れ居り候。こゝにして言ふ可き事ならねど、或は思ひ傷みし事などありての發願なら

ずやとも疑はれ候。

椽側に坐し、低う念誦致し候て、さて堂に沿ひて石疊を拾ひ行き候ふに、後より呼び止むる人あり、振り回れば、役僧のひとり、伴なる人に前方物教はりし縁の候うて、見覺の今の後姿に斯くは、いざ此方へと長き廊下傳ひに、龍の間、山水の間と過ぎて、唐子の間といふへ案内致し呉れ候。

此處には小やかなる西向の剪裁あり、地の濕り稍乾きたる日當には、斑猫の二つ三つ釘の如く身動もせず起ち居候。垣の外側には太杉の幾本が並み立ち候が、樹間よりは秋の日を一杯に浴びたる稻田、濤の如く白光りにのたうつ鳴子



繩、思ひなしに稍疎に透ける櫟林など遠目に見られ候。伴  
の男は曩の尼僧が身の上を問ひ試み候と覺しく、役僧は仔  
細らしう、御茶一つ召しませと、天目さし出し乍ら、仰せらる  
ゝは埒の外に俛首さて候ふ方に候か、渠は日野西家の二の  
姫君に候が、先頃管長の得度受け候ばかり月の終には奈良  
の興福院へまかる筈と聞き候。何故の發心とか、管長様が  
御縁者ゆゑの事なるべしと、是はまた餘りに素氣無き言葉  
振に問者も今は口を噤み候。  
かなた田中の一本櫟に、尾羽打ち振りてさきと高鳴ける百  
舌鳥の、ついと身を竦めて薄原に沈むよと見候ふに、再び不

哭

器用に身を翻し、木立を超えて遠く遠く下岡崎の方へ飛び  
去り候あとは、邊は再び静寂に歸して、心耳は滞り無く自然  
が囁ぐ妙音を聴くかの思あり、身も法器の名を許されしや  
うの心地致候、あはれ涙溢るゝばかりの吉日や、斯る日、斯る  
御堂に法衣を纏ひて静かに經典を誦する身と成り候はん  
には、眼は穢土を離れて、瑠璃の階道通じ、赤珠瑪瑙の樓閣聳  
ゆる七寶の池に、大さ車輪の如き蓮華を認めて、其香潔に感  
じ、耳は鄭聲に遠ざかりて、微風が吹きゆるぐ寶行樹寶羅網  
が音に聞き入りて、其微妙に驚く喜びを享受し得べく、一  
念の祈願によりて、愛着深き吾が香兒の君をも度脱せしめ、

咒



光明偏在のなかに歎喜の聲を放ちて、永劫えうげつの生に歸るべきかと存じ候。

今樅林の蔭を出て、稻畑いなばた小路を日傘ひがささして行く人、さても後姿うしろすがたの其君に似寄り候ふ事かな。流石に手を揚ては呼びかね候もの、振り回りかへ様の笑顔あは夫と見定められ候はゞ、憚りある事ながら、或は法兄ほふけいの眼を忍びて、鐘樓しゆらうを攀ぢ下り、秋草の繁みに隠れ入るなどの失徳はあるまじきかと思ひ惑ひ候。法器の名は愚なる沙汰にこそ候へ、心相羸劣にして、自ら煩惱結縛解く事有るなく、忍辱を知らず、精進を解せず、心勞し、形困み、苦を飲み、毒を食ひて、さては地獄よみの眞洞まほらに陥

り候ふ事か、然らば夫も厭ひは候はず、黒髪長き人と共に候はゞ――

此上に認め候ふ事は御免下さる可し、そは御互の動悸を節するばかりにても言譯いごとは相成り候ふべし。

程經て勤行ごんぎやうも濟みたるらしき頃、友を促して廊下を足早あしはやに辭し去り候。院の門前に咲きこぼれ候野菊の一輪は此に候。(同九月二十七日)



雨の午後

三

朝より秋雨しとしと、降り暮し候ふにぞ、餘りの寂しさに  
門を出て、塀外に伸し懸れる芭蕉葉の蔭に頻吹雨を避け  
乍ら暫くは立ちて眺め候。南禪寺より華頂山へかけて、一  
帯の山の顔ぼんやりとして眠れる如き雨景色、誰やらの書  
に見た様に覺えて、其名を思ひ浮ばず候、斯る日には記憶の  
働きさへ鈍るやうにこそ候へ。今白川路を水車小舎の側  
よりとぼくくと傘さして來る翁、おほ方永觀堂あたりの寺  
男に候ふべし、千草色の風呂敷包片手に提げて、何處まで參

らねばならぬ用向か、下京あたりならば歸途は屹度夜に入  
るべしなど思ひ遣り候。

斯る時、紫苑、女郎花の賣残り、折柄の袖笠に歸り後れの大原  
女など遠目にも見られ候はゞ、吾が掛想の人かとも忍ひ候  
ひて、芭蕉葉の蔭に伸びあがりて、飽かず、飽かず、其後姿見送  
り申すべきを。

さきの寺男家のかげに入りてよりは、濡燕一羽だに通る候  
はず、雨は愈々降りつゞき候に、今は氣を腐らして室に歸り  
候。(十月一日)

三



舊 棲

西

今日は午後より上御靈前にさる人を訪ね候に、折悪しく不在に候ふまゝ、室町上立賣へ出て、十年前の舊栖を訪れ候。少し手前に候ふ同志社の北寮は、當時知れる人のありて、多時出入致したれば、路傍の裏木戸より窺ひ候ふに、一棟は取壊されたるらしう、其跡には雑草生ひ茂り、二畦ばかりは茄子畑の候ひて、流石に指頭の實を結びたる、見るから哀に候。他の一棟も玻璃窓とところ／＼破れし儘にて、此頃の夜寒を住む人は如何にやと思ひ遣られ候。吾が栖みしは之より

幾軒目に候ひしか、若し南隣なる同志社教師館い號の存へ居ずば、鬨は跨ぎ候とも、聊かの柿の實鬻ぐ店を此ぞとは、疑ひても見まじかりしに候。奥深なりし一構は、小き貸家幾つかに別たれ、春菊蓋など種あるし候。十歩の後園は、屋根續きの裏長屋と變り居り候。孰れも西陣あたりの賃仕事する人の住めるや、物忙しき箒の響、其處此處に聞え候。覺束なき筆に姿繪かくと申しては、姉を寄りかゝらせ候ふ紅梅も見えず、秋更けて婢女が朝清めに、又しても此様やと落葉うるさがられし紅葉の老樹もあらずなり候。唯獨り生残りて昔日を語り顔なるは、井桁朽ちし車井戸にこそ候へ、終

五



日機織る蓬鬢の子等も、生命のうるほひは同じくこの底より掬むに候。

矣

年経て昔日の戀人にめぐり會ひたらん時、甚くも面變は有りながら、流石に眉の邊にありし婀娜を見出たる懐かしさも、之には過ぎじと存じ候。

覺えず涙落ち候まゝ、急ぎて井桁を立ち離れ候。露次の入口に立ち乍ら、添乳致し候ふ青女房の珍らしげに吾姿まもり候ふを見ては、またも顔を背け候。(同十月七日)

## 落書

室町へ出て、大聖寺辻を東へ折れ候、こゝらあたりには名は忘れ果て候が、氣輕な盡術巧者の媼と、忠義者の飼犬と住ひ候ひしが、流石に家のみは、朽ちしながら夫と思はるゝが残り居り候。

同志社教師館は號の横手に來かゝり、不圖首をあげて其白壁を眺め候ふに、昔ながらの落書取亂れて怪き様に残り居り候。立ち寄りて熟々見入るれば何やら見覺のあるもの三つ四つのみならず候。僅に十歳を數へ候ふのみなれど、



人は逝き、家は壊たれ候ならひなるに、果敢なき落書のみは、  
魔の神の鎌に彫られ候ふ咒文の如く、朽ちぬ様に物錆び候  
ふは、何等老天の諧謔に候ふぞや、年甲斐も無き神の道化好  
ばかりに、人は翻弄せられ、擲掄せられて、猶愁ひ、且つ泣くの  
真面目を擲つ能はざるに候。何やら調子外れの甲聲の耳  
元に鳴り渡り候ふに、振り回れば女教師めきたる中年増二  
人、急ぎ足に烏丸を南へ折れ候。血の氣も枯れ果てたる細  
面に、鼻物凄く尖りて候。薔薇の花片に顔押あて、蕊の粉に  
鼻頭汚しながら、神秘の香嗅ぎたりと賢らだつたは、斯る鼻  
持ちたる人にこそ多く候へ。

神よ、女教師と落書との孰れへか旗幟を明らかにし給へ。

(同十月七日)



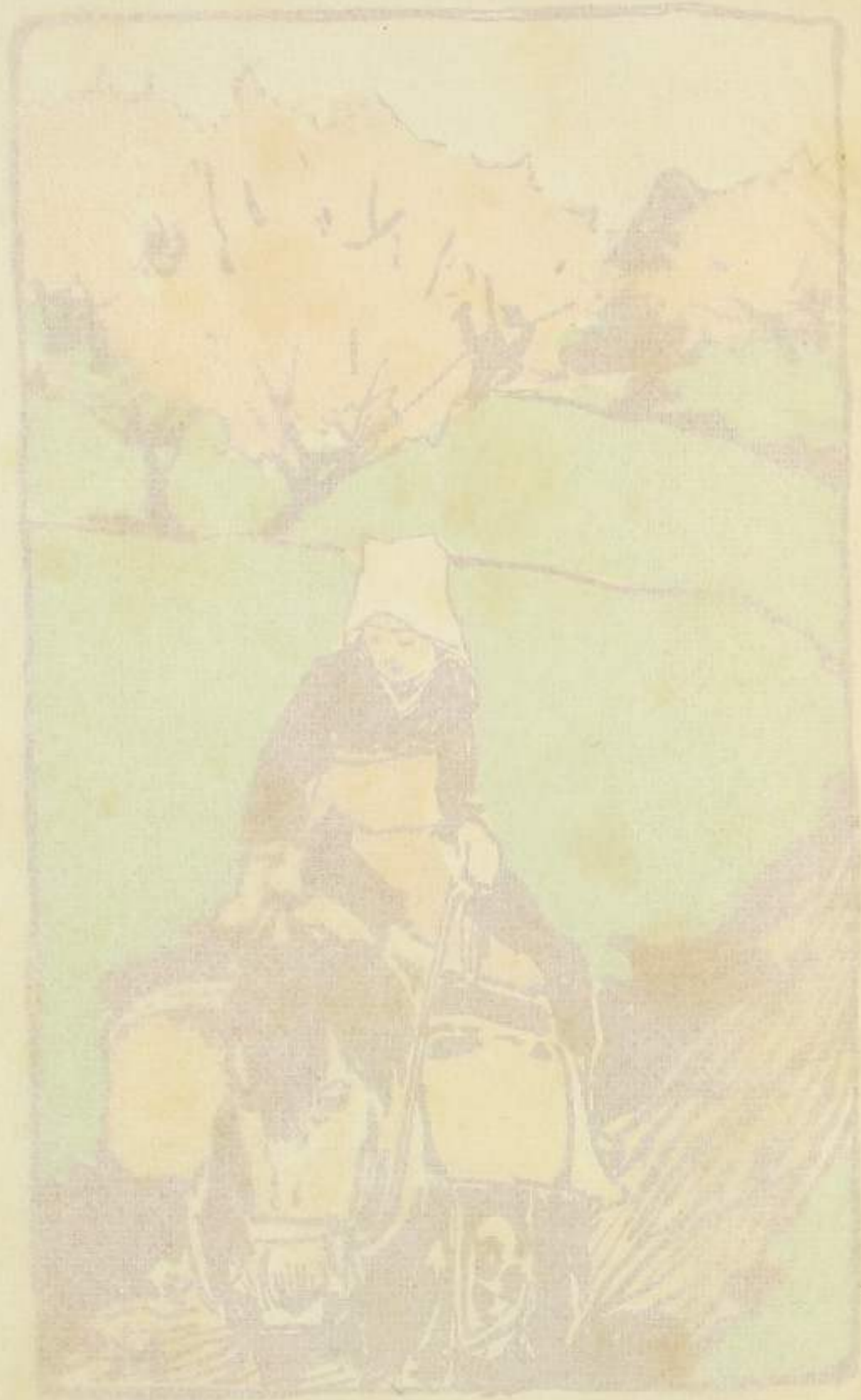
をりをりの記

杏

奈良の一日

楠樹くすのきの若葉わかばやはらかに風にそよぎ木暗こくろ往むかさかふ鹿の角は  
まさに寸すんに伸の立ちぬ。

こゝは奈良の舊都なり。  
木叢こむら洩ひらる阜月ふつきの日光ひかり星ほしまだらに白める野阜のぶの青草せいそうに身を  
横よこへて戀こひがたりするもの、三木天遊子さんぼくてんゆうしとわれ。友は思おもひ激  
したらんを、強つよて自ら抑おさふる如ごとく額ひたいに掌面てのひらおしあて、言いふ





をりをりの記

奈良の一日

楠樹の若葉やはらかに風にそよぎ木暗往きかよ鹿の角は  
まさには寸に伸立ちぬ。  
こゝは奈良の舊都なり。  
木叢洩る阜月の日光星まだらに白める野阜の青草に身を  
横へて懸がたりするもの三木天遊子とわれ。友は思ひ激  
したらんと強て自ら抑ふる如く頼に攀握あしめて、言ふ





やう、

『わが愛は、地獄の如く強かれど、其火の如くしかく嫉妬ふか  
きものにあらず。掛想の女子あながちに一人をのみとは  
言はず、二人、三人、猶情の同じ濃やかさを持して戀ひわたり  
得べけむ。君はいかが思へるこは吾にありては極めて眞  
面目に極めて清かる事實なり。』と。

答へて言ふ、『われは雄蕊の數知れず、一の雄蕊を抱き合へる  
は、これを圃の花罌粟に見、雌禽の幾羽か、一の夫にかしづく  
は、これをわが家の家鶏に見れど、吾等の戀にかからむとは、  
思ひもかけず。執着もあり、嫉妬もあり、わが戀の泉は唯一



の觴さかづきにのみこそ掬みて酔ふべきなれ。しかも吾は自らの故をもて、あながちに君を斥けず。唯切に望ましきは婦人の前に君が戀がたりせざらむ事也。こはまことに君の幸なればなり。』と。

三

相見てほほ笑み、振りかへれば、思ひきや、こゝにまた偷み聽の客人ありて、眼光やはらかに、蹄の音輕う馴寄り來らむとは。われらは折悪しう、これに賂ふべき乾菓子ひとかけの一片をも持ち合せぬ身なりけり。(三十三、五)

### よき日

われは今毎日新聞社の樓上にあり。窓をあくれば、日は暖かに、春の氣水の如く流れて室に入りぬ。

淀川は肥後橋のほとり、舟は今しも帆をあげぬ、京への積荷など運ぶなるべし。河浪白く碎けぬ。艫をあやつる男、嘖聲たからかに罵しれば、女顔に日を浴びてにこやかに岸に立てり。

白き石階のあたり、仲仕六人五人、手輕に揚荷を擔き合ひ、は

三



ては背を叩いて笑ひ興ず。

橋の袂に綸を垂れたる鏝廣の帽あり、黒き人影半圓にあたりにうづくまる。

灰色の石高き建物は驛遞をつかさどる館なり。男小走りに門をいで、北にまがりて隠れぬ。海のかなたの消息など傳ふるなるべし。

人往き、人かへる。

馬駈けぬ。

かくの如き眺めにも猶心激するものは不幸なるかな、天地悠々、こゝに秘密あり、またの名を平和といふ。おほいなる

は天の超理の權なり、これを調へぬ。拜むべきにあらずや。さかんなるは吾等が内部の達なり、これを聞きぬ。尊ぶべきにあらずや。

二月十五日、今日はよき日なり。(三十四年二月十五日)



鳩物語

六

われは羽白き山の鳩なり、ひと日麓の里を過ぎて、百日紅咲く高樓の窓に、あえかなる身を凭せて夕眺めする少女を見しより、圓き胸ぞ乱れそめたる。  
夕ぐれの戸に近う鳴かんと後めたければ、山に歸りて己が巢に入りぬ。時は秋のなかばなり、われは黄櫨の葉の濃き紅色なるに染めいでたるを、嘴に啄ばみては樹の根めぐる細き流に落しぬ。水は行き行きて少女が門に淀むなり、戀の使ともなるべくや。

濃き紅色の黄櫨の葉は残りすくなうなりつ、昨日は樺色なるを摘みしが、今日は黄金色の淺きを落しぬ。流れに沿へる女が門の枝折戸は終日閉されのままにして。  
またの曉、夢さめて見れば、寒かりし夜半の風に残んの木の葉は吹き拂はれてあり。  
ひとり枝を降りて谿間の白き石に伏し、今日よりは何を戀の使にと思ひわづらふ。冬の日淡き琥珀色を帯びて雪の如きわが背を射ぬ。  
それよ、羽ありけり、戀には惜しき使ならめやと、嘴もて殊に清きを啄み切りて水に落し、が、紅き血すこしにじみて春

七



痛みぬ。

六

二日三日十日二十日、——尾羽抜き去りて今は胸毛も残り  
すくなくなりつ。刺すが如き鱗あひの氣に、わが肌痛みて  
堪へざらんとす。空を仰げば夕日がくれの雲漸く鈍色に  
染みて、雪催しの躰に移りゆくめり。

今ぞ宿命の鞭をうくるの日、寧ろ慕はしき窓のもとに倒れ  
て、人の目に入らんにはと、岩に攀ぢ羽ばたきして岩より落  
ちぬ。——羽とてはあらざるなりけり。

いかにして來しやを知らず、小さき風信子の種子は、岡をこ  
えて牧の垣根に咲くといはずや。われは今暖き軒の下に

伏せり。

窓あきて白き顔さしのぞきぬ、宵の明星など見んとするに  
や、さもあらず、囁きのやうに、

『まだ來給ふべき時にあらず。』

といふ。見れば髪には眞白なる鳩の毛花やかにかざした  
り。わが胸ときめきぬ。

反古一つ風に吹かれて落つ、主人知らず、窓閉ぢぬ。

『試煉の火焰逆まさよるに、脚すくみて得往かず。嚮導す

る井ルギルが』なうこの焔こそベアトリチエと君との間を  
隔つる關と知らずや。』とありしに、かの白き桑の實が血に

究



ぬれて唐紅色からくねなるに染みきといひけんそのかみこひ當時戀こひの奴やつてピラムスが  
チスべの名乗なりのりに、今はのひと眼見めひらきたりし如く、忘るる  
間まなき人の名呼よばれては頑固かたくななる心の物怖ものおそれも溶け去ん  
ぬ。——爾しかこそ、君。』

七

文字もじは男手をとこてなり、人も知る『淨罪界』二十七の卷に名高き句な  
りけり。わが心痛まざらめや。

窓の裏うらに歌聲おこりぬ、譬へば銀しろかねの鈴を振るに似たらんか  
し。

君は流れの見わたしに、  
ひと本咲ける百合の花、

われは河原の砂に飛ぶ、  
翼かよわき野の胡蝶。

よしや水みの面おもてにくるめくも

われ金色こんじきの羽ふりて、

紅べにの香たかきくちびるを、

君に觸れでは止むべしや。

われは後様うしろさまに倒れかかりぬ。天あまには雪ふりいでつ、打ち咽  
びしは誰も聞かざりしなるべし。

これぞ羽白き鳩の戀物がたりなる。(三十三年十一月十日)



## 椿の花

三

二月末の白晝墓の如く静かなり。椿花おちぬ。  
隣りはいささかの物賣る家なり、店に客人なければか、奥ま  
りたる一室に梭の音す。をりをり鸚鵡の鳥叫けたたまし  
う起るは、籠の餌壺の乏しさを訴ふるなるべし。  
家鶏高く歌ひぬ。午後二時なり。  
旅人ふたり表通りを過ぎゆく、麥の生ひ立に、此程のあたた  
かさを説くなど、程遠からぬあたりの人なるべし。  
またしても椿花落ちぬ。

花重けれど枝を折らず、土に墮ちて根を去らず。上なるは  
花びら艶やかなり、光榮は枝にあり。下なるは萼に鏝を帶  
びぬ、休息は根にあり。――  
椿こぼれぬ、さながら崩るるに似たり。  
あゝ花落つるなり、さすがに心痛まざらんや。

(三十四年二月十八日)

七



## 戀がたり

七

朝、天遊君きたりて頻りに戀をかたりて歸る。  
『野狐忠實を説かんととき、君は手飼の鳩を隠さば足りぬ。』と  
西の邦の諺にいへり。この君が戀の言葉の多さよ、すすろ  
に吾をして鳩はと後へを顧みさしめぬ。  
幸にして隠すべき愛嬢は持たぬ身なりけり。

(三十四年二月二十日)

## 詩論

詩歌は庖厨のものに似ず、口頭に上してのみ、容易く味ひを  
知るべきにあらず。

テオクリトスは其牧歌二十一に、漁人をして『狗は寝ねても  
餌を忘れず、われは蟹が子魚を夢みぬ。』と歌はしめぬ。吾  
等枕に就いても猶思ひ且つ考ふる所あり、唯入り立ちの足  
らざらんを憂ふ。  
他容易なるかな。

吾は詩を論じて渠等に似ざるを喜ぶ。(三十四年二月十六日)

七五



閑居

六

鄙ながら昨日今日は花の噂のみ。  
日は暖かに、多羅葉の葉ゆるがず、大氣いと静かなり。  
家の子どもは摘草にと相ひきて出でたちぬ。  
獨り門を閉ぢて本草綱目などあさる。  
稍倦みて籠の繡眼兒に新らしき水を掬み、倉をひらき小麥  
をすくひて背戸の鶏に與ふ。日永ければ舐いで、時に卵  
狙ふ例なるに、今日は雄鶏の物いましむる鳴聲だにきこえ  
ず。小さき獸すら、物盜みするには勿躰なき日和なりとし

も觀ずるにや。

門を叩くものあり急ぎ出で、迎ふれば、柑子賣の爺なり。  
一の樋に鮓のよく綸にのぼるよしなど語る。  
空紺青色に晴れて、日光醉へるが如し。摘草の子ら幸おほ  
かれかしと思ふ。(三十四年三月六日)

七



## 自然の賄賂

六

『自然は牛に角を、馬に蹄を、兎に疾き脚を、魚に鱗を、鳥に翼を、男に才を與へけるが、女もまたこの例には洩れず。そは何ぞ、楯も槍も叶ふまじき眉目美さなり。みめ美き人は黒金よりも、火焰よりも猶ほ強かり。』——これはアナクレオンが歌に見えたる言葉なり。  
テオスの戀歌よみも猶ほ思ひ到らざりしか、女は殊更に多くの賄賂をうけぬ。涙と秋波これなり。  
われら男にとりては、いかに隙つぶしの道具立ぞ。これを

自然の賄賂といふは隱語なり、二枚底なる女の胸ならでは知るに由なし。(同年四月十日)

七



懷 舊

合

こゝは會津東山のなにかし湯なり。  
春の日ながさに、物がたりも今は盡きはてゝ、同行の人後藤  
氏も羽金氏も相次いで手枕の夢に入りぬ。  
寂しければ吾も袖かついで横には臥しつれど、心動きて眠  
るに堪へず、たちて椽にいで、初崖の下を走りゆく湯川の瀧  
つ瀬を眺む。水は險しき山のはざまをめぐり來て、奔流音  
すさまじく、見わたしなる有馬屋の二階より落ちかゝる如  
き絃歌の響と相争うて、末は伏見の瀧に投じ去る。

けたたましき物騒ぎかな、されど猶ほ寂しき事洞窟に隠る  
るに似たり、吾は胸を抱いて靜かに欄にもたる。  
この創の深さよ、薔薇の葉を食まれたるにも譬へんか、いま  
また健かなりし昔日にかへるべくもあらず。仰げば日の  
光和らかに前山に流れて、瑞木瑞枝の色さながら春に酔へ  
る如く、湯上神社の常磐木ひと本、獨り覺めの姿雄に、ほとほ  
と天空に攀づるやと疑はる。常ならば心あがりの詩興も  
あるべきを、今日は物耻のおもひ寂しう、まさま久には見る  
に堪へず。  
不幸なるかな、われは老武者の如く、ふる創を指して昔日を

八



誇る能はず、人知れず痛疹をしのびてその癩痕を守るなり  
けり。

嘆かざるべし、嘆かざるべし、君よ百日紅咲く園に見しその  
日の夢は美しくしかりしを。三十四年四月十五日、會津中山にて

## 鑛泉

衣ぬぎて鑛泉に入る。湯槽は自然の岩垣によりて造り、  
こぶる趣きに富みぬ。泉は鹽類泉にして透影あきらかに、  
立ちて脚の爪をも數へつべし。

酔ひたる人の湯の暖まりに、心溶るが如きか、立ちながらう  
とうと、眠りに入るを揺り覺して、室にかへらしめ、獨り背  
を岩垣によせて浴みするに、黒髪長き人扉をおして、つと入  
り來りしが、わが影を見て逃ぐるが如くまた出て去りぬ。  
かれ心弱き事市の人に似たり。



男といはず、女といはず、時に自らの性を忘るるの崇高と幸八四  
福とを知らずや。

天泉なほその清らかなるに足らじとするか。  
あはれなるかな。然り、渠は逃ぐるが如くに去んぬ。(同上)

## 夕 暮

いま夕暮に物思はしげに、錦岡の木立に立てり、化現せば髪  
長う、顔うつぶしに、唇に白き指を噛める女性せしやうの神なるべし。  
兩岸の高樓たかのまゐ客人きやくじん去りて、燭ともの影ほの暗う、箒携へたる婢女はしための  
欄によりて立てる、咒咀しゆそ稱とへ居るやと疑はる。  
見よ、夕暮は白き流を踏みて、徐かに近づき来るなり、物怖れ  
せぬは狂女に似たり。  
逃げて室に入り、今更のやうに同行の人の顔を眺め入りて、  
その名を忘れざるを喜びぬ。(同上)



鶯に似たり

六

西風のわたりに心あがりを感じて、微笑を禁ぜざりしとは、これをシエレエに見、机の抽斗に藏めたる靡れ林檎の香氣に感興得たりとは、これをシルレルに聞きしが、今日人は來て、腹稿調ふるは眞闇なる戸棚のうちに、頭突き入れたる上ならでとはと語る。世に珍らしき習慣もあるものかな。吾はまた三行の句をすら、逍遙の途すがらならでは容易に得難かり。鶯の卵産むに場所定まらぬにも譬へんか。天駟ける強き翼も、水にうかび、はた陸にかへり、休む間もな

き宿命をいはゞ殊に相似たりとせん。(三十四年五月)

七



## 回想記

六

水無月はいつの歳もわれに懇ならず、心許し、人と別れたるもこの月なり、同胞の親みありつる方の逝きたるもこの月なり。それこれの記憶忘れがたく、何は無くて商人の市に過さんは、心安からねば、月の三日といふに、馳せて西の故郷にかへりぬ。

蠶飼もすみぬ。人は鎌磨ぎて野に往けり。昨日今日空晴れたれば、麥蒔るなり。

春徂きて夏の装束いまだ整はず、野山の眺め取りみだれて、

何とは無しに海のあけぼの、白みわたる目路のはてに、上帆のかげを認めて、掛想の客人取り逃したる恨みに堪へず、眞玉なす胸座はたと打ちつゞけ、褐色の髪かきむしりてその舟路を咀ひたる、カルセエイジの皇后の姿もこそ忍ばるれ。野路の逍遙にも倦みたれば、ひと日獨り室に籠りて、たまたま目に觸れたる五歳前の日記など繰り擴げて見る。秋の日、櫻の散葉ふみて東臺に奏樂のまとの訪ねて、洋琴弾く人の願ふくよかなるに驚きぬ。それ「執心」は瘡せたる獨身者と聞きぬ、明日は嫁かずや、優女の君。と戯れたる、日毎通ふ館の隣の棟に丹青の展覽ありと聞きて、朝夙くまかり

六



しに、門守の男、切符もたぬは通し難しと、懇望するをも拒み  
たる腹癒に、學藝の門に割符要すとは思ひもかけざりき。  
其方が口振にておほかたの出来榮をも今は知りぬ。『ここ  
過ぎて繪草紙書きに。ここ過ぎて陶物燒きに。ここ過ぎ  
て徳利學者に。』とあからさまに掲げたらんには、人惑しの  
罪もこそ輕からめと罵りたる、或は新教の教會にまゐりて、  
法話説く人の浴衣すがたに驚き、今さらに讃歌二百十の『萎  
まぬ花の匂へるところ』こそ望ましけれ、そこは『とこしへの  
春』なれば、かゝる粉装の尼姿は見られまじければと歎ちた  
る、いづれの目附も繰りひろげて微笑を禁ずる能はず。

巷の角にて故人に遇ひたらんも斯るべきか、吾は眼子を睜  
りて眺めつ、また眺め入りつ。  
過去は靜かなり、譬へば山の間はさまに隠れたる精舎しやうじやの如し。  
わが思これに尋ね入りて、たまたま洩れ來る『記憶』の光に自  
らの影を認め、その缺げざる事さながら御龕みぐらに藏められた  
る御影みかげに似たるものあるに驚く。  
曩日さきひ、惑ひき、煩ひき、夢みき、饑ゑき、陥りき。その日まことに  
悲しかりけり。しかも追懷おぼへの今日けふ、いづれはあれ、心醉ふに  
足るべき事榮として、朧げなから中に一すぢの光明をたど  
る如きを覺ゆるは何ぞ。



吾世はつひに仇ならじ。

三

人は荷を負ひて帝郷にかへるの駒なり、今の一步ひとあしのたどたどしさも、懸てつぎなる二歩ふたあしのために思ひたゆまず。かつて身も世もあらず嘆き沈みし事あり、果は刃やいばを採りて死をも思ひたちしが、今にして顧みれば込馬こみうまの心弱こよき限かぎなりかし。

貴いかな、吾は活きぬ。さらば水無月、今はあながちに汝を厭はじ。(三十四年六月十九日)

### 偷 盜

寺住居てらまひの冬は寒たふしき例なるを、今朝けさは枇杷の葉をゆるぐ許りの風だに無く、朝日花やかに窓に射すに、籠居こもりもあさましと獨り南軒に背あたためながら、遙かに西の空を眺めやる。高造たかぞうりなる府廳ふかたの館を越えて、かなた播磨境のそれか、聳たかえたる連山の肩を見渡すにつけても、この程赤穂に病める親戚せきのなにかしの身を思ひ出でて、心安からず打ちまどふ。さるがなかにも流石に耳は聾ろうひざりけり、ふと怪しき物音の、地續つづきなる墓場の方に聞えたれば、ふりかへるに、何者ぞ、



卑しき男の今垣を越えて内に入らんとはすなる。さては  
晝盜賊かな、曩の日住職なにがし一領の法衣を盗まれたり  
と語りし事もありき。

わが前には常盤樹の生籬めぐりたちたれば、彼方よりはそ  
れと吾が姿見透し難かるべし。やをら垣を飛び降りて、襟  
のあたりを掃ひぬ、塵埃など去るなるべし。さて氣遣はし  
げに四邊を見やる。そこには數知れぬ墓碑ならび立ちぬ、  
高さ低きそが間を潜りぬけて、忍び足に此方へ近づくけは  
ひす。

二分を數へざるべし、剪裁の南側なる潜り戸しづかに開き

て、卑しき顔さし窺きぬ。われ屹と睨みつ、渠も流石に驚き  
しなるべし。

『好いお天氣さまで。』

追従めきし笑を鳥嘴の如き唇頭に浮べながら、帽子脱ぎと  
りつ、見れば垢づきたる袷衣に薄き羽織を纏ひ、眼は小さく、  
額は禿げたり。

われは答へず、嘲りを帯びて頭をふりぬ。

渠は何をか呟やける如くなりしが、遠慮げに帽を戴き、した  
たかに前庇あさへて、小走りに本堂の横手を逃げ往けり。  
哀れなる哉、盗むものは斯の如きか。吾は今の如く人の小



さく弱きを見し事あらず。

矣

聽け、堂に木鉦の音まじりて、讀經の聲ほがらかに境内にわたり初めぬ。今ぞ知んぬる、老いたる盜人よ、汝の乏しきは衣と糧とのみにはあらざりけり。(三十四年十一月廿四日)

## 鳥叫び

寺住居てらぢまゐの身にもさすがに春は忘れず、剪裁きざにありて桃の枝ぶり見つくるふほど、庫裏くらのかなたに所化しやのあわただしう叫ぶを聞きとがめて、何事ぞと駈けゆけば、堂の屋根に巢ねごもれる雀子すずめこの、まだ孵りいでしばかりなるを、尋ひらにも餘れる蛇の嚙みつくさんとぞすなる。母とも覺しさが、近き批ひ柅ていの梢しやうに飛びかへりて、聲を限りに鳴き騒げる、親心おやこころのさこそといとほしまるる事かな。軒餘りに高ければ、攀のぼぢゆきて救はん術すべだにあらず、あれよあれよと打ちまもるのみ。

を



ホオマルは『イリヤド』二の卷に、鳥のかゝる禍をとらへて、『美  
しき木の下蔭、泉のほとり、百牛ととのへて祭壇しつらへる  
折しも、オリムピア大神の奇しき祥こそ現はれたれ。まだ  
ら背の蛇やをら壇の下を滑りいでて、木かげに入ると見え  
しが、木叢の上枝には、巢籠の雀子八羽、母と合せて九つあり。  
蛇は情もあらばこそ、先づ雀子を嚙みくだし、羽叩うちて歎  
さまはれる母をも、つと振り向き様に翼くはへぬ。』と咏み、  
モスカスはまたヘルキュルスの妻メガラが子を失ひし恨  
み泣をこれに譬へて、『繁みがかくれの巢を蛇に襲はれ、雛は嚙  
みつくされたる母鳥の、けたたましき鳥叫の音にたてゝ甲

斐なくも飛びかへる如く』と歌ひにき。

鳥の時の蛇に襲はるるを見る毎に、先づ思ひ浮びてわれら  
の想像をかざるは、これらの名高き句なりけり。



離愁

三月十二日、神戸沖に錨おろせる汽船、讃岐丸の二等室の食堂を出づるもの四人、先なるは此度海を超えて西の邦の大學に遊ばんとする抱月氏、次なるは柏蔭氏、春草氏及び吾、京都より難波より抱月氏の行を送らんとて來り集へるなり。梯を攀ぢて一等室の甲板にいたる、さき程郵船會社の小蒸氣船に乗合したる遊學生の三人四人、稍離れてこれは見送

人の團躰なるべし、麥酒樽のやう腹太りたる、赤ら顔の前額禿げあがれる、椿の花形したる帽子背様に冠り、顔付ルウソウの石版繪に似たる、僂儂の大丸鬚結ひたる、頤に指頭の瘻ある萌黄袴の西洋婦人、そが娘とも見ゆるプロンテの兎もすれば事々しう眼鏡もち添へてあたり眺むる、孰れも落付かぬ様は心入らぬ受答するにても知らるべし。階を下りてこゝの食堂に行けば薄闇き室の片隅、拭き清められたる食卓をなかに、頬鬚の人ふたり、一人は白きも交りたるが、麥酒傾けつゝ、頻りに海外貿易の現状など語る風なり。吾等の足音に聲稍細めたるらしきに、興妨げんも心ならずと、再



び甲板に現はれて、北の方神戸の市街を眺めやる。  
 濃藍色の天残りなく晴れ渡り、彌生始めの暖かき光新釀の  
 如く溶けて諏訪山つゞきの丘陵に流れ、麓より海邊に擴が  
 れる市の建物ほとく酔へるに似たれど、壁のかゞやき、薨  
 の黒み猶あざやかに認むべし。波止場に行きかふ人の幾  
 人、齒並に繋げる和船の群程近う左手に丘の如く浮べる汽  
 船某號の甲板に人影見えぬまで白き湯氣立ち騰れる、世話  
 女房めきたる小蒸汽船の引切なしに彼是に駈けまはれる、  
 さては逍遙の短艇、水上警邏の船——海の上に、陸の上に、人  
 は機械の如く休む間も無く勞し且つ罵しりて、耳聾ひるま

で騒がしうはあれど、猶穩やかなる事大寺の庫裏に佇める  
 にも譬へつべきか。斯くても何すれど吾胸のふるき痛み  
 に堪へざるものあるや、この日、この時、悲むもの、憤ほるもの  
 あらば其人は確に罪せられたりとせんも言ひ過ぎじとは  
 自らも知りぬ、さらば其もよしや、宿命の矢痕とはに癒え難  
 う、平和なく、閑寂なく、快樂なく、健康なく、誇るべき譽なく、醉  
 ふべき愛着なく、常に煩悶と放浪と争鬪とのみを伴とする  
 の吾は、いかにしても童女の如く嬌えて自然に對する能は  
 ざるなり。今舷頭を掠め去る鷗、わが心もまた自由なる翼  
 具すれど、憂愁に力おとろへて羽叩するだに堪へず、常に



弱きを忌み嫌ふ身の、今日は涙垂れてひとへに汝の世をぞ羨む。

後方に立てる支那の男二人、笑ましげに何を語るや、寧ろ口噤ぐこそよけれ。吾は最早何が故に甲板に立てるかをだに解し難うなりしなり。

## 一一

解纜の時刻近づきたれば抱月氏と別れを叙して小蒸汽船に移る。相つぎて梯子をくだる見送の人、離別の顔いまさらに飽き難う、涙の眼光に甲板の人ふり仰ぎて寂しげに笑

みかはすめり。離魂烟の如くまよひて、人優しき事羊のやう、席相譲りてあるは立ち、あるは凭れぬ。やがて吾が船の遠ざかり行かんとするに、見送りの人いづれも夢より醒めしかのけはひにつと立ち上り、犇めき合ひて、舷に身を伸しながら名残を惜む。讃岐丸には今し錨繰るらし、けたましく鐵鎖のさしる音して、低き帽着たる船員の左右に飛びちがふなかに、旅客の多くは皆甲板に現はれ、身動きもせず欄に凭れて、離愁の情に堪へざらんやうなり。

三丁の距離に船止まること二分、やをら動き出で、再びかなたへ近寄る。欄の人打ち笑むが明らかに見らるゝ頃ほひ、



さと斜に前を横ぎりてまた漸く遠ざかり行かんとす、彼方  
此方一齊にあるは帽あげ、あるは手帛振りなどするが中に、  
此は何のあてやかさぞ。静かに甲板に立てる抱月氏より  
六尺を離れざるべし、黒髪房やかに束ね、さらびやかなる帯  
胸高に結びたる少女の、白き腕かざして一念に帛振るが  
あり。海に来て言ふべき事ならねど、まだ戀知る齡にはあ  
らじ、あどけなき別離の愁を分つは誰が子にか、同じ舷にあり  
ながら夫と見わき難かるが物足らぬ心地す。  
海俄かに傾きかゝりて、讃岐丸は徐かに搖ぎいでつ、今はと  
て諸手さしあげて別離の情通ずるに、抱月氏も帽子脱ぎて

會釋するよと見えしが、つと大跨に甲板を右へ歩きいでぬ、  
己が室へと急ぐなるべし。鷗の六つ五つ勢ひ込みて波頭  
を掠めしが、舷近う來かゝりし頃、急かに群分れて中空に飄  
へり去んぬ。甲板の顔さきに卵子のやう、いま指頭ゆびがしらのやう。  
さては汽船某號の舳に障られて、郵船會社の旗章のみ漸く  
見わけらるゝやうなりし頃には、吾等の船は早くも波止場  
に着きぬ。争ひて陸に上る人、ルウソウの君、麥酒樽の翁、萌  
黄袴の洋婦人、僂僂の丸鬚まるげなど乗合の縁を分つべき誰彼、い  
づれも踵の音輕う、忙がしげに各がじゝの方角とりて市の  
混雜ひんざみに隠れ入りぬ。逐はるゝ如く吾も波止場にあがりし



ものゝこれより何處に行かん身ぞや。あゝ征帆一萬里、海  
廣きこと窮りなきも、猶泊すべきの港は定まりぬ、遊子飄蓬  
として適歸するの地なきもの、寧ろ甚だ悲しからずやと海  
顧みて首うなだる。いま彼所に吾を指して冷笑ひする税  
關の司、汝と大學教授と共に小賢しき事猿にも劣らざるべ  
し、そは眞に驚くべき名譽なり。而も其故を以てながく吾  
が悲歎を防ぐる事あらざれや。(前三月十二日)

### 樂のまぼろし

海に抱月氏を送りてのち、顔知れる女子の神戸なにかしの  
學堂にあれば、久し振に安否を問ふとてたづねゆく。地は  
山の手諏訪山の麓にあり、門に入りて右手、低き平家造にこ  
れは門守の女房なるべし、濯ぎたる衣を竿にかけて、正午さ  
がりの日脚かへりみる。阪の中程薪積みたる荷車、幾臺の  
間を摺りぬけ、豪駝師の剪刀や、過ぎたるらしき植込を左  
右に見て、小砂利の清らかなるを上りつくせば、岡廣みにな  
りて物ふりたる一構の建物前に聳ゆ。土地高ければ港に



出入する眞帆片帆の影、さながら手に取るやう數へつべし。  
玄關の柱に低う吊したる鈴形の古き鉦あり、案内頼む人は  
これ叩ち給へと、小さく書いつけたる槌さへ添はりたれば、  
われ取りあげては、たはたと打つ。客人のなかには、疳高の  
男もありければにや、力打の痕をここに窪みて、この鉦老  
いたる禪尼が頭臚にも譬へつべきかと、掌面にのせて、これ  
圓らかなり、許嫁の男。これ歪みたり、收税の司。これ打ち  
滑りぬ、文部の書記。これ女教師。これ出入の商人と獨り  
戯むるゝ程もなく、枯芝踏みてこなたへ近寄る女あり、文ま  
なぶ程の若き上臈達、いづれも皆同じやうなる容貌したれ

ば、うろ覚えの確かには見分さがたかれど、何と無う面立の  
訪ぬる人らしきに、名を問へば、然なり先づこなたへこそと  
應接の室へ導く。

そこは閑かなる一室なり、三方の書架には、稍手垢に塗れた  
る書籍、雜誌、犇めき合ひて肩を並べ、他のかた花鳥の繪屏風  
立てめぐらしたる背には、一脚の机据ゑられ、紅き毛糸襦袢  
のまだ針さしたるが、障へられたる窓の明りの仄ぐらさに  
倦じ果てたればや、兩の腕しだらなく投げ出して、讀みさし  
の雑誌の上に轉寝したる風なり。窓のそとには、食堂の軒  
下、日當りよき所に、仲仕六人五人しづかに煙吹いて憩ひぬ。



構の模様見よと勧めらるゝまゝ、導かれて階を攀ぢつ、また降りつ、標本、實驗、解剖の室など眺めしも、こゝには最も驚くべき出来事が、二と二の四となり、狐の皮と骨とに剝ぎ割かるゝに止まるのみ、さしたる興もあらねば、逃ぐるが如く去りて廊下を経て樂堂にのぼる。こゝには演奏の室幾つとなく連なり、扉の上に小き木片貼りて各の室の名をぞ記したる。程ちかきに人のけはひあり、やがて風琴の音しづかに十三絃のすがかきを随へてどよみ初めぬ。唯かりそめの稽古と覺ゆれど、これをこちたき標本、實驗の室に比べては、何等の氣高さ美しさぞや。明り窓に遠きこゝ廊下の片

ほとり、吾は靜かに後方にもたれぬ。ああ迫懐おほきかな、まことに樂は小魔に似たり、時としてはその囁きに堪へざらんとす。

わが前に立つは妙齡の優女七人、髪つやゝかに、緑色の衣裾ながうひきはえて、各がじゝ一張の百濟緒琴を抱きたり。九つの詩神が心なげきは古く海のかなたの古人の集に讀みぬ。こゝに手弱女七人、邦ぶりの粉裝何するぞと問ふ程もあらせず、喋し合したらんやう、一齊に若音ふりしぼりて、

人の世にうきは少女や、あくがれの



こゝろ利のみは募れども、  
身は黒金のくさりもて、  
冥府の眞洞につながれぬ。

望ましをとめ、  
常をとめ。

その鎖焼きつくすべき火は、やがて  
わが可惜身をうしなひぬ。  
もろき生命にあくがれの  
こころ願ひのはげしさや。

望ましをとめ、  
常をとめ。

と歌ひ畢りさては堪へず、薔薇の香露風にゆれたらんやう、  
涙はらはらと琴にそそぎぬ。かかる程に忽然としてまた  
も浮び出でたる他の一群、こたびは三人、いづれも白き衣、圓  
き額、まなざし清しく側の七人を妹のやう屹と見おろしつ。  
組み合したる諸手さと解きて高くさしかざし、聲ほがらか  
に、

『われの城、われの力と  
頼む神、ともにしませば、



仇はものかは。

118

死のかげに往くも怖れじ、  
御恵みの光りはつねに、

吾を照せば。

憂なやみ、重なる峯を  
越え往けど、御手にすがりて  
慰めを享く。

世の望みよし絶ゆるとも、  
わが魂の望む都は、  
天にかがやく。

神の手に、仇をしりぞけ、  
御前にて楽しくあげん、

凱旋の聲。』

とぞ歌ひたる。いつれも世の巷にありて心屈せぬ輩なる  
べし。なかなる一人横顔何となう見知越のやう思はれて、  
猶それと考へ及ばぬ折しも、こなた振りかへるを見れば、驚

117



かるるかな。まがふ方なき吾が義姉なり。ことわりや、十年の昔かれが教をうけしは、この構と聞き知りぬ。峠幾つ遠ざかりても鳩は己が巢にかへる如く、義姉が清らかなる心魂は、なほそのかみの窓にかかるや。手をあげて呼ばんとするに、俄かに身軀倒るるやう傾きかかりて、幻は雲と飛び去んぬ。

わが凭れたるは室の扉なりき、振りかへれば肩の高さに白き紙片貼りて、"Private room"とぞ記したる。主人が名を問はんも興なし、思ふに遠く海をこえ來て弘法の職に従ふ人、

身を童女の清きに保ち、朝夕の祈願、禮拜此處にしてながく清淨の生涯に隠るるなるべし。遠山の夕ばえ、巖間の白百合、僧尼の營み、世にまた斯る美しきものありや。吾は幻の破れし故をもて、この主人が把手を曳きしを怒るべきにあらざるなり。(同三月十二日)



消 息 (浪華より郷里へ)

一

今しがた住職なにがし朝露おき結びたる鉢植の花草はご  
びきて、これは舊都北山の陰野かげのに咲きこぼれたる鷺草に候  
が、一昨日の旅の途すがら、所化に根こぎして持ち歸らしめ  
候もの、いざ眺め給へと書篋に据えくれ候まゝ、その傍に筆  
とりてこの消息したため候。鷺草とはいじくも申し候か  
な、花のすがた如何にも鷺のなか空飛びかよへるに似てこ







消 息 (浪華より郷里へ)

今しがた住職なにかし朝露おき結びたる鉢植の花草はど  
びきて、これは舊都北山の陰野かげのに咲きてほれたる鶯草うぐいすに候  
が一昨日の旅の途すがら所化しやに根こぎして持ち歸らしめ  
候ものいざ眺め給へと書篋しやせうに据えくれ候まゝ、その傍に筆  
とりてこの消息したため候。鶯草とはいじくも申し候か  
な、花のすがた如何にも鶯うぐいすのなか空飛びかよへるに似てこ



を候へ。

いづぞやの消息の端にかいつけ候、同じ寺のひと室にて病を養ひ居り候市人の娘なにかし、其後容體日ましに宜しからず、三日ばかり前の朝つひに永き眠に入り候ひぬ。かりそめの縁にはあれど顔識れる間に候へば、その日の午すぎのみにまゐり候へば、ありし人の亡骸はまだその儘に、黒髪のみだれ、被げたる白き帛のすきよりさと流れいで候さへ見られ候、母なるは枕邊ちかく俯伏しに、姉なるは亡き人の嗜みと覺ゆる洋琴とりて、十二ばかりなる振分髪びぶんかみの妹らしきは、かたみの手篋抱きて忍び音に咽び居り候にぞ、こなた



また慰めの言葉も知らず、そこそこに滑り出で候。ピオン  
 がアドオニスを悼みたる歌に「色よき衣まとひて瞑りたる  
 天童のかたへに、嘆き沈みし」愛の子達は、髪かきむしりて、ひ  
 とりは征矢を、ひとりは弓柄を、ひとりは箠を毀ちなどする  
 よと見れば、さては又、ひとりは亡き人の玉履脱がしめ、ひと  
 りは黄金の手瓶に水もたらし、ひとりは脛を濯ぎ」などある  
 さへ思ひ出でられて、さらぬ別にいで會ひ候人々の心の痛  
 みさこそと推せられ候。

今しも中庭一つ隔て候方丈のあたり、河鹿の音色清しくわ  
 たり候。これは去歳の夏住職が嵐峽よりもたらし候もの、

呼笛につれて、銀の鈴振りたらんやう、若音さよらに鳴さい  
 で候程は、身は若葉の色かくはしき大堰の河岸にたちて、梁  
 誇りする若鮎の透影しろきを眺めなどする心地に候。

かねて申上候通、こゝは法華、大光山の末寺に候。假住居の  
 心やすだてに、先き頃所化のひとり、と古庫の書棚をあさり、  
 遺文録のむしばみたるを抽きいで來りて、此程より日課と  
 して、目を通し居り候。五日ばかりあとに候ひけん、離れの  
 一室にて、梅の若葉洩る朝風のそよぎに濡れながら、住職と  
 ふたり椅子並べながら、之を繙き、日蓮が慈悲廣大ならば、南  
 無妙法蓮華經は萬年の外未來までも流布すべし。日本國



の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふ  
 さぎぬ、この功德は傳教、天台にも超え、龍樹迦葉にもすぐれ  
 たり、極樂百年の修行は、穢土一日の功德に及ばず、正像二千  
 年の弘道は末法の一時に劣るか。」とあり候あたり、に讀み  
 到り候時は、住職の眉あがり、肩張り、聲高こゑたかに宗教五綱を説き  
 いで、さてはまた三大秘法といふ事知り給ふか、こは釋尊が  
 壽量品に説きあらはして、末法衆生のために本化上行菩薩  
 に附囑し給へる所に候ぞと、さながら會下あひだがすなる法論の  
 調子に息まきて、説き去り説き來り、午餐ひるけ申しまぬり候寺男  
 の翁を驚かしたる事も候ひき。申し落し候、ランセロツト

物語のむかし事には候はねど、この日は別にまた讀み繼ぎ  
 候はざりき。

住職の説法は兎もあれ、日蓮が一生については、稍會得致し  
 候ふしも候へば、神無月の法會まゐり候までには一詩を賦  
 して捧げんつもり候。

時ははや十時にも近き候べし、こゝは上町うへまちの高臺たかたいに候へば、  
 夏の日の強き光さらさらと満都みんとの費いらかにまたたきするが、さ  
 ながら離れ小嶋こじまの巖頭いわがしらにたちて、青海原の浪の笑ひにむか  
 へる心持に眺められ候。見るもの、聞くもの何とはなしに  
 氣を引き立つ如きは、夏の日なかに候かな。さらばこれよ



り例の日課に取りかゝるべく候へば、取り止めも無き今日の消息はこれにて御免候へ。

籬には木槿の花白う咲き、蟬も來鳴き候。

御身健やかにこそ。(三十五年八月二十九日)

二

麻幹を焚がらく靈祭たままつりも過ぎて世は秋と相成候、一夕奈良の舊都、東大寺の境内に杉の木立の月を眺めし他、今歳の夏は何處へも赴かず、高野の奥に佛法僧聞かむとは、去年よりの願なりしかど、障る事ありて果さず、朝夕塵埃ちりほこりを肩に浴あびて、労働者

の如く動きまはり居候。

唯折ふし閑をぬすみて、安治川尻の岸に立ち、今し纜とらひなを解く汽船に、けたゝましき積荷の音を聞き、吾が凭る石垣いしゐに大潮のたゆたひを眺めて、焼け附く如き午さがりの暑さをも忘れし事あるは、例の癖なればと御推察あるべく候。

げに海は吾が戀人に候、何故にや、吾は山國やまくにの温泉いづゆの宿にては唯の三日だにも堪へられず候、かつて師走しゅうすいの半ば、鶺鴒みどりの芭まにしたしむ頃、有馬に宿りて半夜はんや海を夢み、浪のどよみ、磯いその菜なの香枕かぐしにつきて眠られず候まゝ、起ちて背戸せうこを下り、銀の如き谿川の縁に佇みて、流れゆく水に思ひを寄せし事も候



ひき申す迄もなく、吾は櫻鯛釣る水島の海のほとりに産れし身不幸にして海士となりて、潮に親む能はず、長じては山に入り、都にも住み候ひぬ、されど世に誰か初戀の人を忘れ得る者候べきや、海はわが初戀に候、此程物の本にて、さる庵室に精進潔齋の女、浮世の快樂にまどひて、男と共に巷街に走り出でしが、浮世は偽善多くて住み易からず、身心共に敗れて、二十五年の後、一日人に隠れて再びもとの庵室にかへり、永貞童女の御前にして静かに眠りに入りたる由を讀み候ひしが、吾もまた終りの日には、山を下り、都を出て、海に歸りたきものに候。

この半が年の程に子弟の育英に御經營なされ候様御手紙にて承はり候、婦人の身にしてあはれ健氣なる御事かな、才あるは土豚の如く物に恐るゝが多き時、吾は福音を耻とせずと、異教者の矢頃に自らを進めて、屢時流俗と健闘を試みらるゝ御姿のかひくゝしさ、饑ゑ凍るこの世にては貧は時に憎むべき謀者となりて現はれ候、而も姉君は之を服し給へり。眞實に、眼ある者これを見れば、魂魄をも驚かし候はむ。耳ある者これを聞かば、毛髪ために動き候はむ。今は人の世の辛きも知り給ひぬ、さては澁きも知り給ひぬ。かくて此世御前に花野の如く笑みこぼるゝや、將た不毛地



の如く寂しきもの候やは知り候はねど、凡ての物こゝに存じ、滅びす、朽ちず、明らかなる事火に似たるを覽そなはすらむと存じ候。

御寫眞拜し候、いたくも瘦せ給へるものかな、漸く三十路を越え給ひし許りの御顔はこれに候か、今は十歳の昔にもなり候べし、京は室町上立賣に住ひし頃、小春日和の午さがり、われ姉君を庭の紅葉のもとに立せて、覺束なき筆に御姿うつしし事も候ひしが、其折は花の如くにおはし候ものを。其後の御心勞、よろづ面に現さぬ御性質なれば、胸の裏の痛みは如何ばかりに候ひけむ、御姿を拜して感激に堪へず候。

取り敢へず机邊に飾りつけ候僧房の物しづかに、鼠の騒ぎだに聞えぬ夜は、何かと耳語き給ふなるべし、唯今さきより、住職なにがし茶を饗應はんとて、二度も雛僧つかはし候まゝ、これより方丈に参らむと存じ候へば、書き残したるは次の便にと致し候敬具 (同九月十日)

## 三二

今日は秋季皇靈祭に候、空には霹靂神鼓を負ひて雲の戸に隠れ、地には萬の蟲背の冷ゆるまゝに穴に籠るといふも此頃の事に候べし。昨日は雨ふりぬ、今日は朝の程は日の光



り弱くはあれど、かなた大寺の墓にさしあて候ひしが、正午頃頃又もや秋雨あきさめふりいで候、約束したる人も訪ね來ず、餘りの寂しさに、筆とりて御許おんきよへ消息したゝめ候。

噂には聞き給ひしなるべし、こたび京にある友高安氏は、自作『月照』と『リア王』の翻案『闇と光』とを、四條南座の福井一座に演じさせ居られ候、徒らに古きに習ふの易きと、俗に媚ぶるの卑きとに馴れ勝ちなる今の劇界に、こは思ひ掛なき快心の企なる哉、と甚く感に入り候まゝ、月の二十日彼地に上り、親しく見物仕り候。『月照』は高安氏が三段曲の一、二幕を以て成り候、謂はゞ叙事詩に適して、劇詩に宜しからざるべき

邊に材を取りて、個人と命運の葛藤を描き出さんとしたる、高安氏が膽の太きには先づ驚かれ候、世に劇評家と稱へられて、遂に劇の何なるかを知り得ざる不幸なる人々は、其筋の單純なると、敵役の皆無なるを難ずる由に候へども、そは近代の西劇が那邊に及び來れるかを知らず、また高安氏が観客を試みんとしたる意を悟り得ざればなるべく候。『闇と光』は暴風雨と、大詰の場に殊に力籠りたるらしく、江の北に移せば香氣かほ失せぬる橋の恨み無かりしは目出度候、コルデリアコルデリア嫌らず覺え候へど、リア王は巧みに、フウルは妙を極め候、全躰よりして、前後ともに成功と見て十分なるべく候。



申す迄も無く、今の興行師と俳優の内情を知れるものは、所謂演劇改良の急に行はざるべからずして、容易に遂げ難きを悲み候が、然るが中に高安氏が身を挺して此の間に處し、福井一座がよく同氏の意を躰し、つとめて其命に背かざらむを期したるは、斯界の一美事として稱賛致すべきものかと信じ候、されば、彼地の誰彼は、名譽の表章として、美しき秋草の花束を一座に贈る由に傳へ候、近頃風情ある事に候はずや。

二十一日午後、友三人と連れ立ちて嵐山に遊び候、いつ見ても美しきは此の景勝に候、一同河中なる岩に坐して寫真う

つし候、中なる一人鈴木鼓村氏は殊更に袋の如き太腹露に示され候、氏は聞えたる琴曲家なればこの裏妙音を藏すとしも山水に誇られしにや、寫真出來あがり候はゞ御覽に入るべく候。凭ひたる温泉の宿に女あり、面ざし林檎を綽名呼びたる郷里の少婢に似たれば、産れを問ふに、笑つて答へず、名を惜む事藝苑の人に似たりと悔しがり候。夕暮、手招せらるゝを幸ひに、渡舟に乘し徐かに揖させ候、折から孤舟小鼓を打つて流れを下る人あり、風情頓に加はり候、流石に京なればと感じ入りたる事に候。別に御送り致し候、櫻漬は、天龍寺の門前にて購ひ求め候もの、春光三句の



價今は僅かに三錢に足らず候。 勿々。(同九月二十四日)

### 飼鳥日記

十五日

われは稼穡かせとくの家に産れしを、不幸にしてこゝ三歳みさいばかり都みやこ住すまの身みとなり、雲のたゞずまひ、水の流れ木伐きこり男をとこ草刈くさかり女種めね蒔まき蒔まき入いれなど、僅わずかかに夢ゆめにして親おやむに過ぎず。夏の白晝まひる鐵橋てつきやうの欄干らんかんに身みをもたせ、八軒屋やちけんをいづる川がは蒸氣船じょうきせんの行方ゆくまへを眺ながめては、街衢まちまたのたゞかひに破やぶれて、舊蘆きゅうろの心こゝろやすさに歸かへりゆく商人しょうじんの後姿うしろすがたを吾われかと疑うたがひ、大路おほみちをさしる荷車かぐるまの列りゆうに行いき



あひては、聽ては町に下され、村に解かれて、あるは厨房に嬪おんなが手助けとなり、あるは屯たたらに童女どうにょの晴着はれぎとならむなど思おもひやる。野雉きじは子飼こがひせられて、漸おそやく羽伸はねのぶるに至いたれば、岑上せみかみをさして飛びかへりぬ、これを名けて野心のこころといふ、吾もさる類たぐひにや。神無月かみなつき時雨ときぐふる此程は、わけて山家やまがのおもむき慕慕はるゝ儘こゝろ、心慰こゝろなぐさのはしもと、今日けふさる鳥屋とりやにつきて、文鳥ぶんてう一番いちばんひを求めきたりぬ。この鳥古とりふるくは盛んに珍重ちんじゆうせられしが、今は飼かひふ人希ひたひたになれりとぞ、其故そのゆゑを知らず、吾は姿すがたに音色ねいろに田園でんえんのおもむきを忍しのばしむるもの饒にほさを愛あいで、殊更ことさらにこれを撰せんびしなり。

購かひひし籠かご狭せまければ、新たに設たてけやるとて、古ふるき箱はこを壊こわち、匏ひょうをか。薄暮はくぼ漸おそく成なり、移うつりかはらしむ。籠かご歪よこみたれど、裏濶うらひろく止とどり木多きおほければ、鳥とりは喜よろこばしき風かぜなり。權助ごんすけといへる狗兒いぬこかへる角田かくた氏しのもとへ消息せうししたゝめて、文鳥ぶんてう飼かひひたり、見みに來きずや。君きみが家いへの狗いぬは家いへを守まもれど、僕しもべに過すぎず、吾わが家いへの鳥とりは盡つくす所ところ無なけれど、天童てんどうなりと誇ほこる。

十六日

午後二時、  
覺めめたり、憎にくきかな秋風あきかぜ、庭前ていぜんの枯葉こはを捲まきて、あわたしう



もわが凭る板戸に吹きあつるとは。

見しは限りなく美しき夢なりしを、眺め、窺ひ、はた振りかへれども、夢の何なりしかを知らず、唯美しかりきとのみ。餘りの口惜しさに、再び机に伏したれど、頭惱みて堪へ難ければ、つと起ちあがり、おほ跨に庭をそぞろあるきす。

あゝ夢よ、静かにもまた清らかなるは、色鳥にも似たり、物音に驚き去りては、再び剪裁に下り來らむこと思ひもよらず。

さる人來り文鳥を見て、これは見るべきにや、また聞くべきにやと問ふ。答へて、吾は鳥商人にあらず、さる際は知らず、

見もし聞もし、自然のおもむきあるを愛す、彼等に與ふる所は日に半勺の黍に過ぎねど、吾に教ふる所はかいなでの博士が比にあらずといふ。其人にがむ。

### 十七日

多時夢に驚く事かな。

童兒を携へて佛生會に詣づ、童兒は五歳ばかり、漸く歩み得べし、誰が家の子にか似たりと覺えて、其名を思ひ出でず。大路は人の往來繁ければと、翁ふりて、家並に挟まれたる小路を此方よりこそと導く。道漸く峻しくなりまさと覺



えて、ふと見れば七歩の前行き絶えて、行手は闇き海に、家並と見しは嶮しき崖とぞ變じたる。危しと小さき案内者を擁き止めんとするに、つと身をすり抜け、振りかへり様に冷かに笑ふは、鼻尖り、頤薄く、灰白の髮肩にそゝけたる老婆なり、鵲の如き聲して、

『疾くかへれ』

といふ。化生には後見すべきにあらずと、流石に眼いからして起ちはだかりたれど、動悸堪へがたうなりたるまゝ、じり／＼と後退りするに、こゝも路崩れたりと覺しく、脚踏みはづし、あはや身は千仞の谿間に倒れ入らむとする刹那、老

婆は燕の如く駆け寄りて、すがれたる手に吾が肩摺みあげたり。

『天死せんには、最早遅きぞ』

その聲、その顔、その眼光——嬉しきかな、夢破れぬ總身の汗流れて油に似たり。

夢は賢し、物語り簡易にして、よく情を動かす、その人をして信ぜざらしむる迄に變り易きは、神經するどき持前の性によるのみ。今朝思ふ事甚し、午前三時。

\*

\*

\*

\*

澳太利の彫塑師、アルフォンヌ、カンチアニが六年の經營に



成るダンテが像の模寫を見る。そのかみの流行服着けて  
巖頭に立ちたる詩人の姿、静寂譬なきものあるに比べて、巖  
根をめぐれる幾多冥府の亡者、蛇に卷るゝもの、互に推し退  
くるもの、口あきて巖を嚙むもの、永劫解くる無き宿命の苦  
み、あきらかに讀まれて、肉戦くの思あらしむ。これもまた、  
怯ず地獄を見來りし雄心の人か。

二十日

文鳥を飼ひて思ひ出でたるは、谷中墓地にある雀塚なり。  
今は七年の昔をも數ふべし、天長節のあしたなりき、上野圖

書館に行くとして、森川町を経てさる官立學校の横手を通り  
かゝりしに、今日の祝ひ日を發火演習など催すにや、武装し  
たる若者其處此處の柵にもたれて、戯言いひ交しては聲高  
に笑ひ興ず。中なる一人つと銃とりあげ、身をすくむよと  
見る程に、けたままし響して、煙白う邊を籠めたり。餘り  
の亂がはしさに、われ聲あげて「何物ぞ」と呼ぶに、柵の内には  
踵の音亂れて、小使部屋の方へと逃れ去りたるらし、何事とも  
覺えず腹立ちながら邊を見まはすに、行手に何やらん蠢く  
ものあり、近寄れば雀なり、扱は彼處なる桃の樹に遊びたら  
んを、砂利こめて切り放ちしなるべし。拾ひあげて息吹に



暖めなどすれど、甲斐もあらず、わが掌たなご、みにして息絶えぬ。

廻り路して谷中に出で、墓所そここゝと涉り歩き、殊に大きな杉の樹の根を撰びぬ、春ならば根岸の野路のちにおりて、種々の花摘み來り、和かき床をも製りやるべきを、時雨の頃とて漸くに銀杏いごの落葉二片ふたひらを拾ひ集め、その間まに小さき屍せいきを包みて葬り了り、程よき木枝こえだを墓碑はかじとぞ植ゑたてたる。

其頃は日毎上野へ通ひしかば、朝夕あさゆふに一度ひとたびは必ず墓を訪ひよるに、折節は牌墓守しるしはかきりが箒はきにかかりて、掃き倒さてある事も鮮からず、拾ひては立て、拾ひては立てたりしも幾度いくたびなりけん。年経るまゝに訪ふ事は漸く希になり行きしかど、愛し

み合ふ女などありての故ならねば、何かにつけて思ひ出でけり。

\*

\*

\*

\*

書を読むにも、句を煉るにも鳥籠側に置きて、興を助けられ、また物教へらるゝ事鮮からず、今更かゝる小さき形骸に籠められたる自然の力の偉大なるに驚き、メエテルリンクが『蜜蜂の生活』第八章の終りに説きたる言葉など思ひ出してしみぐと感じぬ。

二十一日



郷里より消息の端に、幼き姪この程鶺鴒納屋に追ひこめ、最早わが物と籠の用意などしつらひて、そこへと物蔭を捜し求むるに、糲穀とやなりけむ、遂に姿見出し得ず、果は祖母をせがみて風車買ひたりとあり。

鶺鴒こそ風情ある鳥なれ、山家の今日此頃、風呂吹に舌鼓打つ朝軒の掛菜こそつきて、吹嘘く聲の近う聞ゆる、戀する娘は情郎とも思ひたがふべし。吾が知れる人に子飼よりこの鳥を育て上げたるあり、籠の裏に瓢の小やかなるを釣り、青錢ほどの孔を穿ちたり、餌に飽くか、物に怖づれば忽ち其裏に隠れぬ。巧婦鳥など呼ばれて巢を編むに堪能なりと

いへば、萱の穂、藁心等與ふるに啄みだにせず、人香を厭ひてなるべし。四年まへ田舎に居たる頃の冬籠日記を繰りかへし見るにこの鳥の事記して、

「見よ、葉がくれ小さき卵ひかる、ふと見出せるや、歡喜の幻象わが胸を射たり。と咏ぜし詩人が心の羨ましさよ。軒端ぢかく小石打ち合ふ如き物の音聞きて、童子もや惡戯するとして出で見れば、鶺鴒一つ籠のあたりを飛び潜り行く。上枝にもものぼるべき翼もちながら、何戀しうて人の家近くなつき來るにや。爐火抱いて家の子ども物語り合ふ雪の目芭のほとり、耳聞しつゝ、自然の天地の餘りに過分なるよ、



とも観ぜぬ風に遊びる鳥ぞと思へば尼額なる手飼の鳩  
にも愈りて可愛しや。』

一五〇

とあり、急に鶺鴒見たくなり、鳥屋には飼ひもやすると、折柄  
尋ね來れる商人の小者に聞けば、知らずといふ。

\*

\*

\*

\*

今日は此頃に無き日和なり、鳥を日當り宜きあたりに運び  
來り、己も晴軒に俯して背をあたたむ。物思ふには勿體な  
き程の日和ながら、心何となく憂ひて樂まず、頸擁いて獨り  
涙を啜る。鶴ならばころろ——とも鳴いて人呼び覺ますべ  
きを、吾が天童は止り木にかしこまりて羽蟲など搔く風な

り。

二十二日

またも夢みぬ。

何處といふを知らず、赤縁など派手なる色の破衣引き纏へ  
る婦人、戸毎に窓に居凭れる貧しき街をわれ通りかゝりぬ、  
新嘗祭もはや過ぎたりと覺しく、雲の色は銹を帯び、巷路に  
は炭賣の聲などきこゆ。今し暮れかゝりて、一道の光のみ  
立ち迷へる、かなた物鬻ぐ家の軒端に、一人の乞巧聊かの錢  
幾度か押し戴きながら、怪しげなる手眞似にて躍りかゝり



しが、吾姿を見てつと駈け寄り、涙の目に振り仰ぎて、君吾は  
胡桃くるみなり、あれなる家の山雀やまがきわが耳を啄くばまんとす、願はく  
ば君が履の爪先に隠し給はずやといふ、鳥は愚なり、耳を鼻  
と言ひ逃れずやと戯たがむるゝに、「辱かたじけなし、吾は花ぞ黒き花ぞ」  
と呼はり、其言葉尻のまだ消えやらぬ間に落ちて胡桃とを變  
じたる、若し心得ず一步をあげなば地に踏みつけたりむ、つ  
と路を片側にとりて見守れば胡桃は呪咀のろいの符よの如く据え  
られて、尻腐らんまでも、其座は移らじ、慾深よくまの翁おきなそと障り見  
るだに、其指はかゝまり屈くして永久とこに掌たもとあくる事叶ふまじ  
など思ふ。左右さうの家並やまには何時いつしか窓閉ぢて、薄闇うすき明り

幻まぼろしの如くさしぬ。

ボオが鴉からの賦咏ふえいみけむ感も、これには過ぎざるべし、さめて  
枕頭の鳥籠とりかごを疑ふ事甚し。(三十五年十一月)

白玉姫畢



明治三十八年六月五日印刷  
明治三十八年六月十日發行

白玉姬奧附

金八十錢

薄田淳介

東京市神田區西今川町二番地

金尾種次郎

東京市京橋區西掛屋町廿六七番地

佐久間衡治

東京市京橋區西掛屋町廿六七番地

株式會社 英舍

著者 薄田淳介  
發行者 金尾種次郎  
印刷者 佐久間衡治  
印刷所 株式會社 英舍



發兌元

東京市神田區西今川町二番地

金尾文淵堂

大阪市東區南本町野摩前南入

杉本書店

發賣元







目書版藏堂淵文尾金

オーキンミラー  
野口米次郎 共著  
**劍と戀の日本**

幸田露伴序歌  
鹿子木孟郎畫  
美麗 訂裝  
金四十錢  
郵稅四錢

加州オランダの高丘に退隱せる大詩人ミラー先  
生は、日本風の愛して其保護者として居る今  
日露伴の作を野口氏に贈る所を以て野口  
氏の作を交ふ通篇悉く劍と戀とを歌へる者就中余が  
少き鳥の一章は組著者名の音楽師ラクストン氏の譜  
に唱はるゝを以て其眞價を知るべし乞ふ愛讀を玉へ

大壺 坂等 朝當 日撰 懸小 賞說  
**琵琶歌**  
大鏑平 倉木福 桃清百 郎方穂  
著書畫 (口本)

金郵 六稅 拾八 錢錢  
一度紙上に登載せられて其妙を賞せられ東西  
二十有餘の劇場に演ぜられて益々其美を知ら  
しめたる者はこれなり作者今や滿洲に軍に從  
ひ劍戟の事に忙しく而して作者の心裡の妙想  
は内地にありて其精華を開けり激越なる琵琶  
歌の綿々として全篇の骨子となり負けじ根性  
の爆裂彈といはれし男と花の如き令嬢の美し  
き心と如何に相對せるかを見よ

河井 醉 茗 著  
**塔影**  
長原止水表紙畫  
三宅克己口繪

體裁瀟洒、四六版二百頁  
定價四十五錢、郵稅六錢

製本本綴 口繪奉書摺  
▲一部の詩集をすら繙くこと能はざるは人生の最大不幸  
なり、山なる關は、大氣に養はれ、人の胸は詩に養はる  
詩集「塔影」は、河井醉茗氏が最近三四年來の傑作五十一篇  
より成る、清高純潔、一點の厭味なし、▲偶ま花やかに語  
る人は、毎に花やかなる人にあらず、一時、眼を射る如き  
文字は、又一時、人を眩惑せしむるに止まる。「塔影」は  
毎に温顔を以て讀者の胸に接す、少くとも飽くことなき  
詩集なり

目書版藏堂淵文尾金

中村春雨著  
**密航婦**  
金七十錢 郵稅八錢

釘裝クロス綴美裝

中村春雨著  
**無花果**  
(錢八稅郵錢十七金)  
裝美綴スロク裝釘

往年大阪毎日新聞が金五百圓の懸賞小説を募集したる際坪内博士、  
幸田露伴、故尾崎紅葉三先生の審査に依て第一等に當選したるは即  
ち春雨氏の無花果にして、當時の文壇を騒がし、世人無花果を手に  
し、ユミヤ夫人を口にしざるものなかりき、爾來幾歳、版を重ねる  
と九度、發賣部數幾萬たるを不知、實に明治小説界の異彩なりとす、  
久しく版絶へて江湖の需に應ずるを不能りしに、漸く釘裝善美を極  
めて第九版は成れり、夫れ無花果は在來の陳腐なる舊套を脱して材  
を宗教に執り、信仰と人情の衝突、家庭と社會の撞着より生ずるあ  
らゆる悲劇が、良厚珠の如き女主人公の温情と及び希望と良心の復  
活とに依りて遂に和氣霽々たる樂天地となりゆく光明小説にして、  
同時に家庭に於ける良好なる讀みもの也、世の子弟も讀むべく教育  
家も共に熱讀を價するものなり

中村春雨著  
**雛鳩**  
金四十五錢 郵稅金八繪

次目  
丁蘭盆會。吾林。雜り種。片男根。道羽子。  
けふ一日。もつれ糸。雛祭。白妙塚。娘氣  
實。癡村。落。繪畫哲學。ちぎれ文。天神橋。  
自然詩人。尼のゆくへ。ついでに錦。浮沈。  
わが罪。二本松城。鐵道馬車。妹山。鐘脈。  
月の船歌。二病犬。鐵道馬車。妹山。鐘脈。  
以上二十有餘の短篇小説を收む皆是れ小な  
りと雖もダイヤモンドの如き寶きもののみ



目書版藏堂淵文尾金

菊池幽芳著 鏑木清方畫  
**妙** **な** **男**

鳥子彩色金銀字入洋裝美麗  
繪葉書及口繪挿入  
金六十錢 郵税八錢

妙な男は一篇の戲曲的構想より成り、多少の喜劇趣味を帯べる頗る奇警の小説なり、思ふに單調なる文壇に一異彩を放つものは必らずやこの小説ならん、變化縱横にして興味溢るゝが如く、始より終まで讀者を魅し去りて手に巻を描く事能はざらしむるの妙あるべし

菊池幽芳著

●よつちやん 全一冊(品切)  
●小妙な男 後編(近刊)  
●小秘中の秘 全二冊(近刊)

菊池幽芳著

**七** **日** **間**

各金四十錢 郵税各四錢

←(冊二下上)→

本書は露西亞の皇室の内外に起れる尤も慘憺たる小説にして最も美に起れる大膽なる最も狡に起れる最も機敏なる大政治家あり六尺有餘の皇帝の親任厚き死の境を彷徨一蹴せられし其最後までせんば安んずる能はざらしむるもの蓋し本篇の如きは無からん

目書版藏堂淵文尾金

與謝野晶子著 藤島武二畫

**小** **扇**

**み** **た** **れ** **髪**

落想に聲調に變幻百出して獨創の妙才優に一生面を開き、之に盛るに紅根紫怨纏綿悽愴の情熱を以てするは我が晶子女史の歌にあらずや、曩に「みたれ髪」の著あり、洛陽の男兒、才調に驚いて顔色無からんとせしもの、今又此新作「小扇」を得て如何の感ありしぞ、「みたれ髪」は三版成りて市に盡き四版將に成らんとし、「小扇」が巻末には上田學士其他の「みたれ髪」の細評を附録とせり、世の人再び盡きざるに求め玉はずば又憾なしとせんや、希くば此鬼才の女史が濃婉の欣調に耽り玉へ

美 裝 金三十五錢 郵税四錢  
美 裝 金三十五錢 郵税四錢

明詩青 星集燈 畫片集 譜袖集 (刊切切) (近品品) (刊切切)

(類書輯編社詩新)

與謝野鉄幹著

**む** **ら** **さ** **ま**

金三十三錢 郵税四錢

今や國詩革新の潮流頗る急なるに當り、江蘇の才人乞ふ本書に依つて更に「むらさま」一篇鐵幹氏が長短數十の作詩を収めたり加ふるに奇抜なる製本の体裁まづ人目を一新せしむる三版市に盡き四版近日成らんとす



目書版藏堂淵文尾金

梶田半古作

繪葉書源氏物語

空前の壯麗

繪葉書界

空前の大作

五十四帖五十四枚壹組

桐箱入解説書  
及源語繪葉帖附

(近日刊行)

新海竹太郎作

繪葉書十貳文豪

追次刊行  
十枚

第一 以下近刊

シルレル 壹百年祭紀念刊行

一枚各金拾錢 郵稅貳錢

目書版藏堂淵文尾金

新體詩繪葉書

追次刊行  
一組六枚

金三十五錢  
郵稅二錢

第一 島崎藤村  
第二 薄田泣菫  
第三 土井晩翠  
第四 兒玉花外  
第五 蒲原有明  
第六 河井醉茗  
第七 高安月郊

和田英作合作  
滿谷國四郎合作  
小林萬吾合作  
岡田二郎助合作  
青木繁合作  
鏑木清方合作  
鹿子木孟郎合作

そのおもかげ  
戀六種  
花ふき

短歌繪葉書

追次刊行  
一組六枚

金三十五錢  
郵稅二錢

第一 與謝野晶子  
第二 與謝野鐵幹  
第三 佐々木信綱  
第四 尾上柴舟  
第五 金子薫園

藤島武二合作  
中澤弘光合作  
三宅克巳合作  
長原止水合作  
梶田半古合作

みだれ髪  
むらさき



金尾文淵堂藏版書目

岡吉枝	西村秋亭	新式美麗	小林萬吾	小林萬吾	卅八年度	綱島梁川	須藤南翠
繪葉書花の精	繪葉書植物園	新案おもちゃ箱	人物水彩畫帖	風景水彩畫帖	太平洋畫會畫集	病間錄	說小間一髮
(近刊)	(近刊)	(近刊)	(近刊)	(近刊)	(近刊)	(近刊)	(近刊)
金卅五錢 郵稅二錢	金四十錢 郵稅四錢	金五十錢 郵稅四錢	金六十錢 郵稅四錢	金六十錢 郵稅四錢	金六十錢 郵稅四錢	金壹圓 郵稅八錢	金七十錢 郵稅八錢



